

座間味村阿嘉の年中行事

—ハマウリ（浜下り）を中心に—

(注1) 久万田晋 (注2) 寺内直子

座間味村阿嘉は座間味村の中で比較的古い行事をよく残している集落である。本論は阿嘉で行われている年中行事の全体を把握するとともに、その中の一つであるハマウリ（浜下り）行事に着目し、その実態を明らかにするとともに、阿嘉の行事の中でハマウリがどのような意味を持っているのか、そして沖繩・奄美全体の中でどのような位置にある行事であるのかを考察するものである。

本論文のもととなる調査は、まず1988年に東海大学の小柴はるみ教授によって行われ、89年より寺内、91年より久万田が加わり、現在も継続調査中である。^(注3) 調査は阿嘉の行事の音楽芸能的側面のみならず、それを支える島の人々の信仰や意識、民俗、習慣をも含む広い視野に立った音楽民俗誌的調査を目指している。

本論は、ハマウリに焦点をあてるものだが、今後何回かに分けて、他の儀礼についても考察・発表したい。

1. 座間味村概観

阿嘉は那覇市の西方に位置する慶良間諸島、座間味村の一集落である（図1参照）。座間味村では現在、座間味島の座間味、阿真、阿左、阿嘉島の阿嘉、慶留間島の慶留間に人が住んでいる。戦前は久場島、屋嘉比島に鉾山があり、この二島にも人が住んでいた。

那覇からは村営のフェリー「ざまみ丸」で2時間弱、1991年より高速船「クインズざまみ」が就航し、55分で行けるようになった。また、琉球エアーコミューターの空路では15分という距離にある。

現在有人の座間味、阿嘉、慶留間の各島は珊瑚礁に囲まれ、豊かなイノーがあるが、山は急峻で北側が崖、南側に集落が立地している。一般に平地が少ないため大規模な農業に適していない。戦前は米、麦なども作っていたが、現在

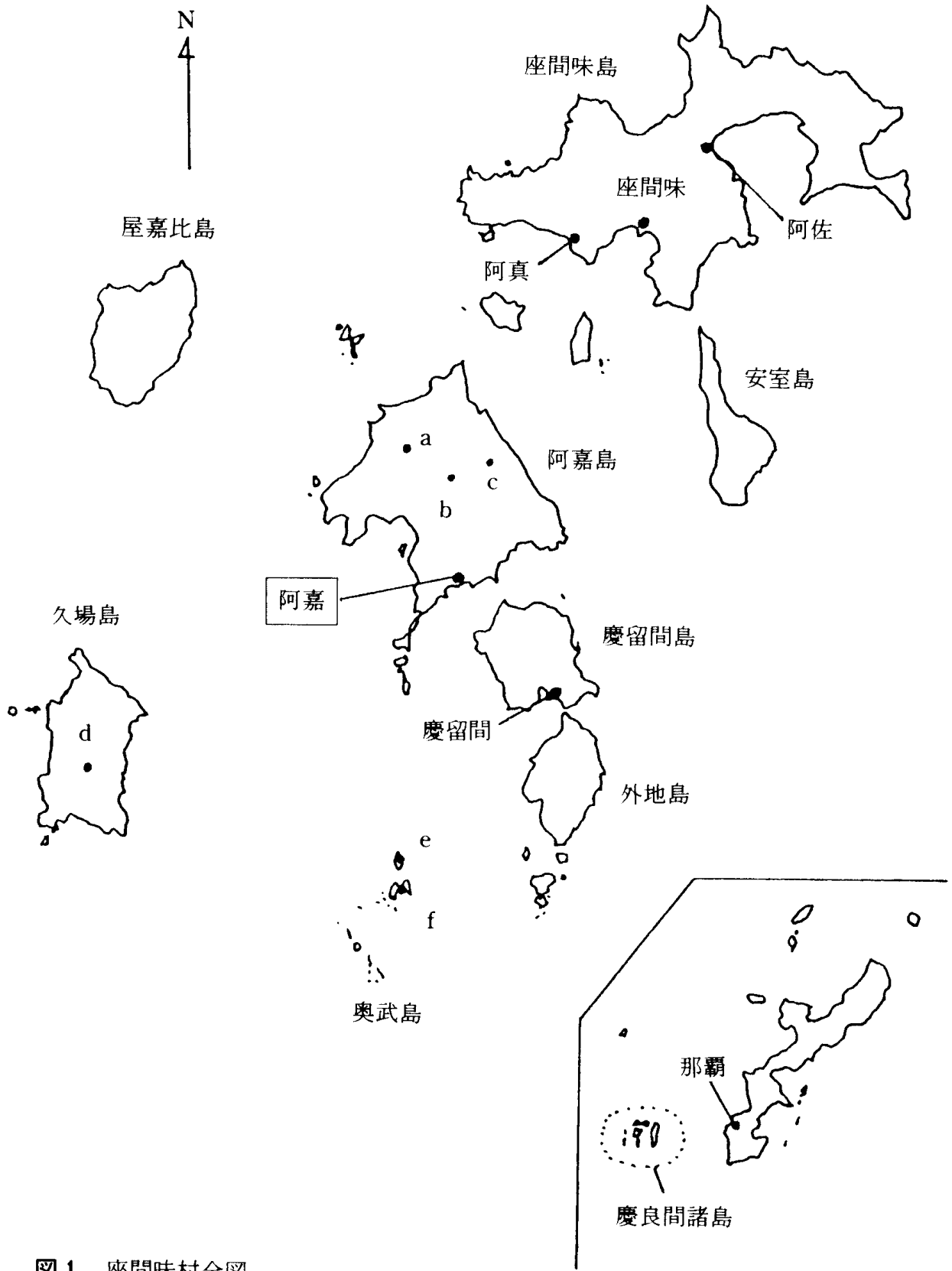


図1 座間味村全図

は野菜、果物が中心である。

琉球王国時代は貿易船の寄港地であり、唐船の船頭をする家が多かった。また、明治34年より鰹業が始まり、昭和40年代まで続いた。ケラマ鰹は品質のよさで有名であった。

去る沖縄戦では、座間味村もはげしい空襲、艦砲射撃を受け、他地域に先駆けて昭和20年3月末に米軍の上陸がなされた。空襲では犠牲者が出、また座間味島、慶留間島では集団自決もあった。美しい自然に囲まれ一見平安な現在の島の暮らしの陰には、いまだに拭いさることができない、こうした悲しい記憶がある。

人口は平成3年8月現在、総数861人。座間味380人、阿左79人、阿真61人、阿嘉264人（125世帯）、慶留間77人である。近年の国勢調査で人口が最も多かったのは昭和15年で、2,348人となっている。鰹業が不振となる昭和40年代後半に人口は1,000人を割り、減少が続いたが、近年観光が盛んになるにつれて、わずかだが増加に転じた。^(注4)

昭和60年ころより全国有数のダイビングスポットとして注目され、平成2年には6万人の観光客が訪れた。現在、村内のかなりの家が民宿を営んでいる。

2. 阿嘉集落概観

阿嘉島は、座間味島の南に位置し、座間味島について大きい島である。人家は島の南側、浜の前に集中している。小さな川を境に東側をシムンダカリ、西側をマタキと言う。

・ムートゥヤー

島にはムートゥヤー（元家）またはニードゥクル（根所）と呼ばれる旧家はいくつかあり、このうち、5つの家から根神を出す（番号は図2集落地図中の番号と対応する）。

- ①ヌンドゥルチ（祝女殿地）
- ②クシ（久志）

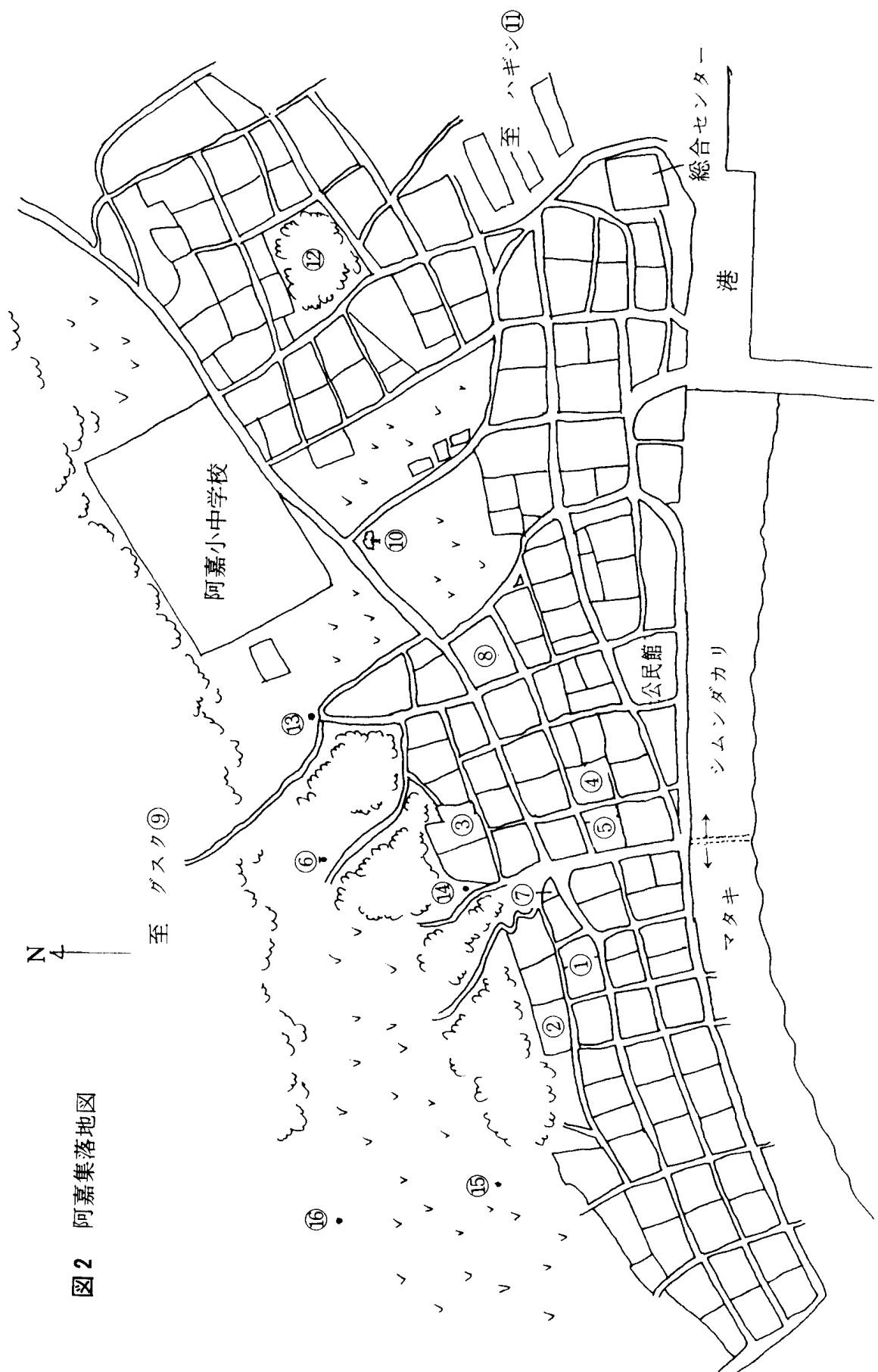


図2 阿嘉集落地図

- ③ ウーシム (大下)
- ④ ツンニ (津武仁)
- ⑤ フカグラー (外小)

これらの旧家は集落の山ぎわもしくは東西の境界線付近に位置している。現在、境界線は、集落全体の中でかなり西にずれた位置にあるが、古くはこの境界を中心にした左右対称の地域がムラの範囲であったと考えられる。近年はホテル、村営住宅、総合センターなど新しい施設が東側にでき、さらに集落は東へと拡大している。また、現在の阿嘉港のさらに東側に新しい港の建設も進んでいる。

・祭場

集落内で祭に関わる重要な場所として、次の場所がある。

⑥ 上殿 (クサト)	クシの管理	└── ウマチー関係
③ 下殿 (ウーシムの宮)	ウーシムの管理	
⑦ ウフンジョーシ、⑧ ウルンメー	──────────	獅子舞
⑨ グスク	──────────	ミヤラニ
⑩ ウルン (御殿)	──────────	└── タントゥイ
⑪ ハギシのムイグラー (森小)	──────────	
⑫ イビヌメー	──────────	海御願

・嶽

タキヌブイ (嶽登い) やウマチー、御願行事の時に遥拝の対象となる次のような嶽々がある。嶽々には、その所属とされる根神 (後述) がある。^(注5) 現在その対応は次の通りであるが、中嶽に所属する根神がない点^(注6)が不審である。これらのいくつかは1713年に成立した『琉球国由来記』(伊波普猷他編『琉球史料叢書』名取書店 S.15 以下『由来記』)に所載の嶽と一致する。また、根神の何人かも『由来記』と一致すると考えられる。クボー嶽以下は『由来記』の記述とほぼ対応すると考えられるが、現在の大嶽、中嶽と『由来記』記載のスズキヨ御嶽、仲森御嶽の関係が不詳であるなど問題点も多い。

	ア	イ	ウ
a 大 嶽	ヌル (ヌンドゥルチ根神)	大 嶽	スズキヨ御嶽? (トモヨセ?)
b 中 嶽			仲森御嶽? (ヨキヤガリ?)
c クボ-嶽	ムチジキ (ウ-シム根神)	クボ-嶽	=コバウ御嶽 (モチヅキ)
d 久場島御嶽	クシジチュ (フカグ-根神)	大 嶽	=久場島御嶽 (クセツキヨ)
e 奥武島御嶽	ウシチャキ (クシ根神)	大 嶽	=奥ノクハゼ御嶽 (オシカケ)
f 奥武島御嶽	エイチャサ (ツンニ根神)	中 嶽	=奥ノ大地御嶽 (ヤイキヤサ)

ア. 現在の嶽と根神

イ. 根神がタキヌブイで登る嶽

ウ. 『由来記』記載の嶽と根神

(a～fの記号は図1中の記号と対応する)

このうち、大嶽、中嶽、クボ-嶽は阿嘉島内の標高60～80メートルくらいの山中、久場島御嶽は久場島の山中にあり、奥武島御嶽は阿嘉島南方の海上に突き出た岩群である。

阿嘉における嶽と根神の関係をさらに複雑にしているのは、タキヌブイ（嶽登り）という行事である。阿嘉の各家はすべて大嶽、中嶽、クボ-嶽の3つのどれかに属し、旧暦8月に餅と重箱を持って、各々の嶽に登る。その際、根神も3つのどれかに登る。ふだん所属し遥拝する嶽と登る嶽が一致するのはヌル、ムキジキのみで、あとの根神は一致しない。この問題に関しては現時点までの調査ではこれ以上のことは不明であり、今後の課題としたい。

・遥拝所

集落の西の崖上にアマグシクがある。旧暦3月のクバジマウシーミー（久場島御清明）で海が荒れて久場島に渡れない時、ここから遥拝する。^(注7)

・井戸

井戸は、水道が引かれる以前は生活に不可欠の施設であり、それ故に篤い信仰の対象であった。水道が普及した現在も水や井戸に対する信仰は引き継がれ、ムラの年中行事の中に、カーウガンや獅子舞の祓として残っている。

ウフガー 現在も使われている最も重要な井戸。子どもの産湯、ウマチーの神酒造りの水、ハーリーの青年の清め、獅子頭の清めなどに使う⁽¹³⁾。

カーグラー 現在も水が湧き出ている(14)。

シタヌカー(マルガー) 現在も水が湧き出ている(15)。

ウエヌカー(イキヌカー) 現在も水が湧き出ている。この水は美味しいと言われている(16)。

この他、集落内の堀井戸として、新垣、ミーシキ、ミーシキグラー、ミージョグラーとなり、宝生、阿嘉島の敷地内に井戸がある。^(注8)

・墓地

墓は集落の西のはずれと東のはずれに集中している。正月ジュールクニチや清明祭、タナバタなどの時に拝む。拝みの対象となるのは、現在実際に骨をおさめる墓の他に、昔の墓(遠い祖先が入っている)、昔先祖が住んでいたと伝えられる跡なども含まれる。

(東側) タジリ墓、クバマ下、ハギシ墓、ワラグラー、ヌル墓、玉ウルン、ウーシンニ

(西側) 外小門中墓、當間家墓、伊佐川門中墓、東イ小門中墓、御殿前門中墓、ガンヤー、仮墓、読田墓

3. 神人組織

阿嘉の神人組織は慶留間を含めて構成されている。ヌルを頂点に、ナナヌニーガンと呼ばれる根神がおり、その下に脇神人、そして一定年齢に達した人となるヤジク(パーパータ)という集団がある。

・ナナヌニーガン(七の根神)

阿嘉、慶留間にはナナヌニーガンという神人組織がある。7名のうち、5名は阿嘉から、2名は慶留間から出て、ウマチーなどの行事の際、共同で祭祀をとり行う。現在、根神を務めているのは次の方々である。

神名	屋号	現在の就任者	就任年月日	備考
ヌル	ヌンドゥルチ	金城幸子(S.9生)	昭和54年頃	阿嘉

ウシチャキ	クシ	金城春子 (T. 13生)	10数年前	阿嘉
ムチジキ	ウーシム	垣花和枝 (T. 9生)	22才	阿嘉
エイチャサ	ツンニ	中村ウシ (M. 42生)	19才	阿嘉
クシジチュ	フカグラー	中村トミ (T. 7生)	35才	阿嘉
ミークム	ミーヤ	中村克子 (M. 36生)	20才	慶留間 ^(注9)
不明	ウフヤ	中村フミ (?)	40年余前?	慶留間

根神はムラの各行事に紺地または、白衣装、白はちまきで参加する。旧6月、旧8月のウマチーの時は特に草で作った被りものであるハナを被る。ウマチーは上殿と下殿で行われるが、阿嘉の5人の根神はどちらかに分かれて参加する。ヌル、ウシチャキ、エイチャサ、クシジチュは上殿、ムチジキは下殿の神人である。

神人の継承は、嫁ぎ先ではなく実家の神を継ぐ。本来は本家の長女が継ぐ。従って、前任者との関係は、「お婆→姪」となる。近年は結婚して島から出ていく女性も多く、必ずしもこの原則は守られていない。

ヌルはかつては一生未婚であったが、先代のヌル、垣花クニコ氏^(注10)より結婚したという。明治以前は琉球王府からヌル田を与えられていた。現在のユンダ付近にその土地が残っている。

・サンナンシー

ヌルにはサンナンシーという世話役がつく。これは満61才になった女性で旧暦9月のミヤラニでグスクに登った人の中から毎年1人選ばれる。任期は1年。祭の時のヌルの荷物の持ち運びや、ヌンドゥルチの掃除など雑事を行う。昔は、ヌルの田畑も耕した。

・ワチカミンチュ (脇神人)

ムートゥヤーの親戚筋の女性などがなる。ムラの年中行事には紺地または白衣装、白はちまきで臨む。現在、7、8名いるが、高齢の人は行事には出てこない。

- ヤジク（パーパータ）

満61才になった女性の中で、旧暦9月のミヤラニでグスク山に登った人となる。各行事には紺地のカスリを着て参加する。

4. 年中行事概観

次に主な年中行事を概観する。表1に阿嘉の年中行事一覧を示した。行事は、実際の調査^(注11)をもとに、現在行われている実態を中心に記述する。かつての状況については、聞き取り調査、文献に基づいてわかる範囲のことを述べる。なお、門中や各家での儀礼に関しては今後さらに調査して明らかにしたい。

- チータチ（一日）^(注12)（旧1月1日）

大晦日の夜（トゥシヌユル）からしめ飾りを飾る。炭と昆布、みかんが付いている。現在は新暦の大晦日に飾り、旧正はそのままにしておく。火神、仏壇、床の間、宮にはトゥシカジャイ（年飾り）といって、赤白黄色の紙を重ね、その上に木炭を昆布で包んだものと米を入れて置く。夕方5時ころからはトゥシウブク（食紅をいれた赤い御飯）を供える。トゥシカジャイは旧正月にも飾る。新正の飾りに米を足して、みかんも代えて、飾り直す。また、仏壇と床には松の葉を飾る（ふだんはチャーギの葉）。床の松飾りと玄関のしめなわはトゥシビーが終わるまで飾っておく。

『座間味村史』によると、昔は各家では、未明に男の子が井戸から水を汲んできた。水は仏壇、火神、床の間に供え、残りの水は飲んだり、手足を清めるのに使った。床の間には上記の他、「あさ漬け」（大根の漬物）「花ピリ」（紅く染めたタコ、イカ）「若さかな」を供え、年始の客にそれを一切れずつ出してから酒を酌み交わした。38才以上の男子は本家へ年頭の挨拶に回った。^(注13)

- ニントーウガン（年頭御願）^(注14)（旧1月1日）

神人たちがヌンドゥルチの家を集まり、年頭の挨拶をし、正月を祝う行事。元日の14時ころより神人がヌンドゥルチの家（宮ではない）を集まり、ヌル、根神らに一般のヤジクたちが「いい正月でーびる」と挨拶をする。各々皿に5

表1 阿嘉集落年中行事一覧

月 日	行 事	場 所	参 加 者			
			神人	区長	議員	村 人
1 * 1	一日	各家、井戸				●各家人
1	年頭御願	ヌンドゥルチ宮	●			
1	※年頭回り(唐船ドーイ)	各家				●青年17-38才
干支	正月トウシビー	各家	●ヌル			●各家人
* 2	初畑 (ハチバル)	各家、ヌンドゥルチ宮 ウーシム宮、クシ宮	●	●		
2	※ハチウクシー	艀船、船主、船長宅				●漁業関係者
3	島ぬ御願	ヌンドゥルチ宮	●	●	●	
4	火の神降臨	各家				●各家の主婦
日取り	正月カーウガン	各宮、井戸	●			
4	※正月家回り	各家	●			●各家人
16	十六日	墓				●各家人
2 15	二月ウマチー	上殿、下殿	●	●	●	
3 2	彼岸	各家				●各家人
3	清明祭	墓地、拝所				●各門中、各家
3、4	浜下り	海岸、拝所	●	●		●女性(昔は男も)
3 日取り	久場島御清明	久場島、またはアゲシ	●	●		●3つの門中
5 15	五月ウマチー	上殿、下殿	●	●	●	
* 17	アブシバレー	各家の畑		●		●各家人
* 17	ナンミン祭(波之上祭)	ヌンドゥルチ宮	●			
6 15	六月ウマチー	上殿、下殿	●	●	●	●村人
25	カシチー	ヌンドゥルチ宮と家	●	●	●	
7 7	七夕	各家				●各家人
13	盆(ウンケー)	各家				●各家人
14	盆(中日)	各家				●各家人
15	盆(ウークイ)	各家				●各家人
15	獅子舞	ヌンドゥルチ家、各井戸		●		●村人、青年団
8 上旬	屋敷御願	各家	●ヌル根神			
9	シバサシ	各家				●各家の主婦
10	八月ウマチー(ウイミ)	上殿、下殿	●	●	●	
12	島ぬ御願	ヌンドゥルチ宮	●	●	●	
15	十五夜	ヌンドゥルチ宮	●			
15	獅子舞	ウフンジョーシ、各井戸		●		●村人、青年団
日取り	海ぬ御願	イビヌメー	●	●	●	●村人
日取り	嶽登い	大嶽、中嶽、クボー嶽	●			●各門中
日取り	八月カーウガン	各宮、井戸	●			
9 下旬	ミヤラニ	グスク	●			
日取り	ウシソゴー	ヌンドゥルチ宮	●			
日取り	出船祝い	ヌンドゥルチ宮	●			
下旬	※シマクサラサー					●村人
9、10月頃	※フーチゲーシ	公民館場所	●			
10 1	※カママーイ	各戸				●各家人、青年団
11 21	※冬至正月	御殿、各戸	●			●各家人
12 上旬	シリガフー	各戸				●各家人
24	御願解き	各家				●各家人

注：日時は旧暦。*のあるものは新暦。

神人は根神、脇神人、ヤジク(パーパータ)

※のついている行事は現在では行われていない。

品のご馳走を持参し、そのうちのいくらかを取り分け、神人に捧げる。サンナンシーがヌルより順に全員にサケ（泡盛）を勧める。次に〈年頭のウムイ〉と〈三句〉、〈かりゆしの歌〉を歌う。〈かりゆしの歌〉の時一人ずつ舞う（全員ではない）。歌詞は正月にふさわしいものを選ばれる。この時の〈三句〉を人によっては〈正月クェーナ〉（後述）ともいう。この後、ヌンドゥルチよりみかんが配られ、砂糖酒（1カ月前に泡盛に砂糖を入れてしこんだもの）がふるまわれる。

なお、1993年は先の1年間に島内で亡くなった方が数名あり、忌みのため参加者は通常より少なく、30人程度だった。

- ・ニントーマーイ（年頭回り）（唐船ドーイ）（旧1月1日）

現在は行われていない。17才から37才までの青年は、昭和10年ころまで「唐船ドーイ」と呼ばれる年始回りを行っていた。マタキの青年はヌンドゥルチ宮、シムンダカリの青年はウーシムに集合し、藁のハチマキをして〈唐船ドーイ〉や〈三句〉を歌いながら各戸を回った（忌中の家は除く）。各家では酒などで歓待した。青年たちは勝手口からその家の火神に向かって火事にならないように、稲や芋がよく育つようにという内容の唱え言をする。^(注15)

- ・ソーグッチトッシビー（正月トッシビー）（旧元日より12日まで）^(注16)

各家の主人または、一番年上の人のお生まれ年の日に、ヌルに来てもらって、家人の繁栄と健康を拝んでもらう。仏壇、床などの前で拝み、儀式の終了後ヌルを饗応する。

- ・ハチバル（初畑）（新1月2日）

1月2日には一家の主人が早起きして、神棚、火神、仏壇に酒、ウブクをあげて一家の健康と繁栄を祈願する。また61才から73才の男性は、三味線、太鼓をもってヌンドゥルチ、クシ、ウーシムなどのムートゥヤーを回り、豊作、繁栄を祈願する。昔は藁のハチマキだったが、今は日本手拭を頭にまく。各家ではビールと刺身などでもてなす。費用は昔は家の負担だったが、今は集落から1万円出る。新築の家も回り、カリー（嘉例）をつける。^(注17)

- ハチウクシー（初起し）（旧1月2日）

現在は行われていない。鰹漁が盛んだったころは、正月2日にハチウクシーを行っていた。未明に組合員が船に集まり、船長室に張られている「船霊ガナシ」に酒、花米、花ピリを捧げて、大漁と航海安全を祈願した。舟には大漁旗をたてる。古くは伴奏無しの〈旅御前風〉が歌われたという。これが終わると、船主、船長宅に行き、宴会となった。^(注18)

- シマヌウガン（島の御願）（旧1月3日）^(注19)

ヌンドゥルチ宮に神人、区長、議員らが集まり、一ヶ年の健康と大漁を祈願する。八月のシマヌウガンと構成は同じ。午前中に神人が集まりウチャナクという餅を作る。米の粉をひいて水に漬けておいたものを丸め、蒸す。忌みのある人も、ごく近親の死者でない場合はウチャナク作りに参加する。御願は午後3時ころより始まる。〈ウムイ〉と〈三句〉を歌う（八月のシマヌウガン参照）。なお、現在は菓子を供えるが、昔はその日に、青年が取って来た魚を供えた。また、鰹の組合からも鰹節（生節）が献上された。^(注21)

- ヒヌカン（火の神）降臨（旧1月4日）

前年の12月24日に天へお帰りになったヒヌカン（火神）は正月4日に再び地上に降臨する。各家の火神の前にウブク（赤飯）を供え、線香を5回焚いて拝む。天から降りる時は速いので、線香は5回焚くという。^(注22)

- 正月カーウガン（日取り、3日より後）

神人が手分けして宮々や井戸を拝む。3日に集めた米の中から「カーウガンのミハナ」といって、残しておいた米を供える。カーウガンは8月にも行う。^(注23)

- ソーグッチャーマーイ（正月家回り）（旧1月4日）

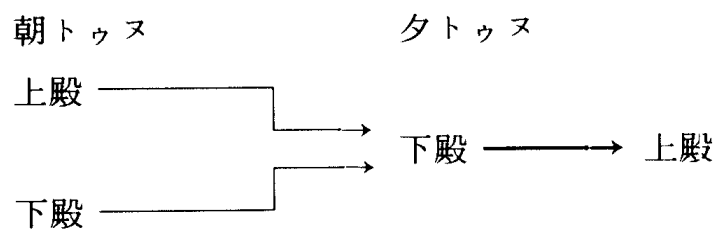
現在は行われていない。阿嘉、慶留間の神人が合同で、キューナを歌って各戸を回り、一ヶ年の健康を祈願する。阿嘉に3日間、慶留間に1日かけて全戸を回る。各家では赤飯、豆腐、吸物で神人をもてなした。戦後しばらくして廃止された。^(注24)

・ジュールクニチ（十六日）（旧1月16日）

「後生の正月」といって、二段の重箱にご馳走をつめて墓参りをする。一つには型ぬきしたウブク（食紅を入れた赤飯）を5つずつ3列（計15個）、もう一つは肉などのサカナ（肴）を9品入れる。清明の時のように墓は何箇所か回り、墓前で酒（泡盛）をかけ、線香をたて、ウチカビを燃やす。^(注25)

・ニングッチウマチー（二月ウマチー）^(注26)（旧2月5日）

麦の穂まつり。阿嘉での儀礼は他のウマチーと同じく、朝トゥヌ（朝殿）、夕トゥヌ（夕殿）の2部からなる。参加する神人は根神と脇神人で、ヤジクは参加しない。神人は必ず上殿か下殿のどちらかに所属している。朝トゥヌでは、各神人が自分の所属する上殿または下殿で別々に祭を行い、夕トゥヌでは、両者が合流し、下殿の祭を終えて、次に上殿で祭を行う。参会者はほかに根人、区長、数名の議員。



祭は午前11時頃から始まる。^(注27)まず、神人らが殿の建物に向かい唱えをしたあと、建物に背を向け、こちら側を向いて座る。上殿では区長、クシの根人、下殿ではウーシムの根人らが、根神から順に神人に酒（焼酎）、神酒を捧げる。神酒の碗は一对（二碗）ある。^(注28)神酒は、上殿の分はクシで、下殿の分はウーシムで少量作る。^(注29)11時20分頃、次に〈ウムイ〉を歌う。11時半すぎ上殿の神人が下殿に行き、下殿の神人と合流し、夕トゥヌの儀礼を行う。儀礼の次第は、朝トゥヌと全く同じである。12時頃、全員、上殿に移動。夕トゥヌの儀礼（次第は朝トゥヌと同じ）を行い、供え物（菓子）を分配して終わるのは12時半頃。^(注30)

なお、二月、五月、六月、八月のウマチーの前日にはウブンワンメ（ウブンワンネとも）が行われる。これは、ムートゥヤーの宮などでご馳走を供え、島

の安全や皆の健康を祈り、その後、その家ゆかりの人、神人らが一緒にご馳走を^(注31)食べる行事である。

- ヒンガン（彼岸）^(注32)（旧3月2日）

各家では仏壇にテンプラなどご馳走を供える。

- シーミー（清明祭）^(注33)（旧3月3日）

3日の午前中、遅くとも9時前までには、村の各家では墓参りに出発する。特に元家の家は、現在納骨している墓だけでなく、昔の墓、先祖の住居跡と伝えられる場所など多数回る。回り終えるには2時間近くかかる。墓や拝所には線香、酒、重箱を持参し、供える。家主が先祖に向かって感謝と祈願をしたのち、おかずのうち昆布だけ置いて、ウチカビを燃やし、次の場所へ移動する。

- ハマウリ（浜下り）^(注34)（旧3月3日）

阿嘉のハマウリは3月3日から4日にわたって行われる。3日には浜下りと踊りを競い合うガーエー、4日には仮装してのガーエーを集落内の数カ所で行う。詳しい内容については後述。

- クバジマウシーミー（久場島御清明）

清明の一環として、3月3日とは別に日を改めて阿嘉島の西方に浮かぶ久場島に渡り、久場島の御嶽参りをする行事である。参加者はムラの代表としてのクシ門中、ヌンドゥルチの門中およびウーシムの門中である。阿嘉島と久場島の間は波が高いため、ここ数年間は久場島には渡っていないという。この場合は、阿嘉の集落の西はずれの崖のアマグシクという遥拝所に登り、久場島をウトゥーシする。まず、ヌル宮に集合し、サキ（焼酎）と餅を持ち寄り、今日、クバジマウシーミーを行うことを報告する。次に餅、サケ、重箱を持ってアマグシクに登り、3日の清明と同様に、線香を焚き、餅、重箱を供え、ウチカビを燃やす。

ウシーミーが終わると、再びヌル宮に行き、久場島清明が無事済んだことを報告する。

- ・アブシバレー（畔払）、ムシバレー（虫払）（新5月17日）

旧暦4月16日はアブシバレー、17日は虫バレーを行っていたが、現在は新暦5月17日に定めて行っている。アブシバレーでは田畑の草を刈り、虫バレーでは畑のクワゴ、カタツムリ、カラスの巣などを取って来て、前の浜から船に乗せて流す。船は村で作る。北風の吹く時は宮古、八重山に、南風が吹くときは渡名喜、粟国に流れていくように、と念じる。^(注35)この日から六月ウマチーの日までヤマドゥミ（山留）^(注36)とって、太鼓は鳴らさない。

かつて、虫バレーの日は海浜にハマヤルイ（浜宿り）^(注37)を作って、朝から夕方までそこにいて、昼、弁当や赤飯を食べたが、現在は行われていない。

- ・ナンミンサイ（波之上祭）（新5月17日）

虫バレーの日、午後2時頃から神人らがヌンドゥルチ宮に集まり、新しいサンナンシー^(注38)を選ぶ。

- ・グングッチウマチー（五月ウマチー）^(注39)（旧5月15日）

稲の穂まつり。阿嘉での儀礼は他のウマチーと同じく、朝トゥヌ、夕トゥヌの2部からなる。朝トゥヌでは、各神人が自分の所属する上殿または下殿で別々に祭を行い、夕トゥヌでは、両者が合流し、下殿の祭を終えて、次に上殿で祭を行う。参会者は神人、区長ほか、数名の議員。

祭は正午ころから始まり、まず、朝トゥヌを行う。神人らが殿の建物に向かい唱えをした後、建物に背を向け、南側を向いて座る。区長、クシの根人、ウーシムの根人らが、ヌルから順に神人にサキ（焼酎）、神酒を捧げる。神酒の椀は一对（二つ）^(注40)。神酒は上殿の分はクシで、下殿の分はウーシムで小量作^(注41)る。次に〈ウムイ〉^(注42)を歌う。ヤマドゥミ中のため太鼓は打たない。供え物（菓子）^(注42)を分配して終わる。夕トゥヌでも同様のことを行う（二月ウマチーの項参照）。

阿嘉での儀礼を終えて午後2時頃、阿嘉の神人（根神のみ）とサンナンシーが慶留間に渡る。慶留間の2名の神人と合流し、慶留間でのウマチー儀礼を行う。慶留間ではこれに先立ち、慶留間の神人だけで朝トゥヌの儀礼を済ませている。阿嘉の神人と合流して行うのは夕トゥヌである。次第は阿嘉の儀礼と同

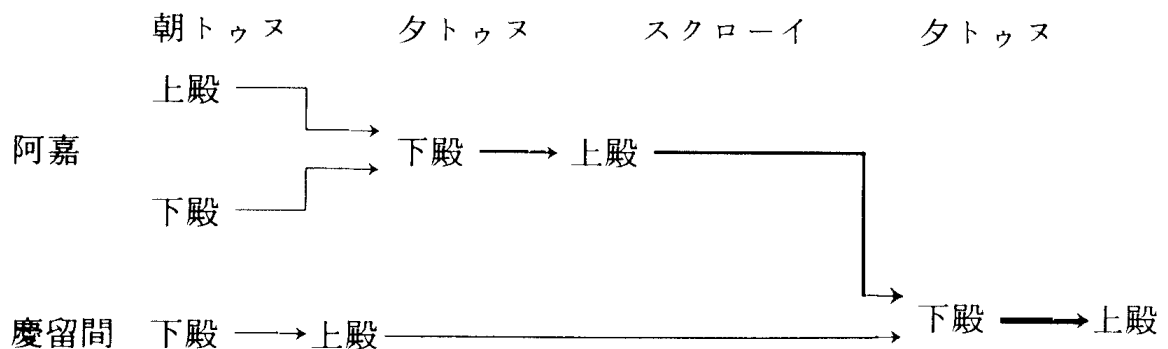
じ。まず下殿で、宮に向かって祈りをした後、こちら側を向き、慶留間の区長、議員から酒を勧められる。次に〈ウムイ〉を歌い、供え物の菓子を分配して終わる。上殿でも同じことを繰り返す。

• ルクグッチウマチー（六月ウマチー）（旧6月15日）^(注43)

稲の収穫を祝う大祭。祭の構造は基本的には五月ウマチーと同じだが、供え物や神人の扮装が異なる。即ち、神人のうち、特に根神は朝トゥヌの時、頭にハナと呼ばれる草の被り物をする。また、供え物は、魚の刺身とカーカスと呼ばれる魚の一種の薫製、それにムラで大々的に作る神酒がある。

また、阿嘉でのタトゥヌの儀礼が終了すると引き続き、大漁祈願と感謝のスクローイの儀礼が行われる。

阿嘉での儀礼の後に慶留間に渡って、阿嘉、慶留間の神人が合同で慶留間でのタトゥヌの儀礼を行う。慶留間に渡る際、神人の乗った船の護衛として、青年団のハーリー船が往路復路同行する。



ウマチーの前日、午前8時ころより、議員の家にサンナンシーを含む数名の女性（神人ではない）が集まり、神酒を3樽（現在はポリバケツ）作る。炊いた米と生米を臼でついたものを混ぜ、水を加えてよくかき回し、一日置くと、発酵してウマチー当日にちょうどよい飲みごろになる。一方、午前8時ころより、青年が港に集まり、供え物の魚を取りに出かける。漁はアミジケーと呼ばれる伝統的な追込み漁法。午後2時ころ前の浜に魚があがり、だいたい60才から70才くらいの男性がその場で魚を捌く。イラブチャーは刺身に、クスクなどはカーカスにする。カーカスは一旦塩をふっておき、ウマチー当日早朝に

公民館脇で男性が煮てから煙でいぶして作る。

当日の未明、アブシバレーの時からヤマドゥミとして閉ざされていた山の口をクスの根人がカネを叩いて開ける。

当日の早朝、根神の何人かとサンナンシー、場合によってはこれに手伝いの女性が加わり、集落周辺の山でハナに使う草を採りにいく。草は、つる草状のもの、ススキのようにまっすぐで長いもの、シダに似たものの3種を集める。午前9時ころより、根神の一人・金城春子氏宅（屋号東イ）で根神たちがハナを作る。ハナは阿嘉の根神の5人分作る。

祭は正午ごろより始まる。五月ウマチーと同じく、朝トゥヌ、夕トゥヌの2部からなる。朝トゥヌでは、各神人が自分の所属する上殿または下殿で別々に祭を行い、夕トゥヌでは、両者が合流し、下殿の祭を終えて、次に上殿で祭を行う。ハナを被るのは朝トゥヌのみである。参会者は神人、区長ほか、数名の議員と、全戸の主がやって来る。^(注44)

朝トゥヌの次第を上殿で見してみる。祭はまず、神人らが殿の建物に向かい唱えをした後、建物に背を向け、こちら側を向いて座る。区長、クスの根人（上殿の場合）らが、ヌルから順に神人に酒（焼酎）、神酒を捧げる。神酒の椀はいつもより大きなものを使う。^(注45)神人が終わると、一般村人にも酒と神酒が回される。神人を初め村人らはバケツや鍋を持参し、その中に神酒をもらって祭に臨席していない家族のために神酒を持ち帰る。

次に神人が〈ウムイ〉、続いて〈デーサカズチ〉を歌う。〈デーサカズチ〉の時、酒（焼酎）の入った杯を盆に載せ、根神2名が出て、他の神人と向かい合って座り、歌に合わせて盆を左右にゆする。次に神人が〈神酒（ミキ）ウムイ〉を歌う。同じ2名が神酒の入った椀の盆を左右にゆする。供え物のカーカスを分配して終わる。朝トゥヌではこれを上殿、下殿で別々に行う。このうち、上殿の神人が下殿に移動する（午後1時半前後）。下殿についた時、下殿の宮の屋根にハナを脱いで置き捨てる。

夕トゥヌは朝トゥヌと同様の事をまず下殿で30分程度かけて行い、次に上殿で30分程度かけて行う。ただし、歌われるのは〈ウムイ〉のみで〈デーサカズチ〉と〈神酒ウムイ〉は歌われない。

午後2時過ぎ、夕トゥヌが終わると、神人たちは立ち上がり、スクロイの

儀礼に移る。神人はススキを手を持って、〈スクローイのウムイ〉を歌いながら、円陣を作って反時計回りに7回回り、上殿と下殿の中間の階段状になった所へ移動する。そこに隠れていたスクローイ役の青年が現れ、「スクローイ」を3回、「グルクンドーイ」を3回叫んだ後、階段の下に用意された網に向かって飛び込む。^(注49)この後、スクローイは区長から杯を受ける。この時、男性によって〈三句〉が歌われる。旋律は女性の〈三句〉とは異なり、後出の〈ウガンバーリーの歌〉と同じである。次にスクローイは海へと下ってゆき、全身に塗った墨を海の中で落としてスクローイの儀礼は終わる（2時半ころ）。

一方、いったん解散した後、午後5時半ころ、根神は引き続いて慶留間で儀礼を行うため、港から船に乗り込む。^(注50)この時、青年団のハーリー船はまず前の浜でウガンバーリーを島の人々に披露してから、神人の乗った船に寄り添い、神人の船の周りを本来7回回ってから、一緒に慶留間までいく。^(注51)ハーリー船を漕ぐ時は〈ウガンバーリーの歌〉を歌いながら漕ぐ。ハーリー船の先頭にはハーリーガネを鳴らし、調子をとる人が乗る。また、神人の船の中ではサンナンシーがチヂンを打ち続ける。これは慶留間の山の口あけのためという。^(注52)

慶留間に着くと、神人は慶留間の下殿へ向かう。午後6時ころより下殿儀礼を行い、6時20分ころより上殿で儀礼を行う。儀礼の次第は阿嘉と同様。ただし歌われるのは〈ウムイ〉のみ。現在、慶留間は人口が少なく、カーカスも神酒も作らない。〈デーサカズチ〉と〈神酒ウムイ〉も行われぬ。供え物の菓子を分配して6時半すぎ終わる。^(注53)

殿で神人が儀礼を行っている間、ハーリーを漕いできた阿嘉の青年達はチェンガーという井戸の脇で、慶留間の青年に歓待され、三味線、太鼓でにぎやかに遊ぶ。

慶留間での儀礼が終わると、再び神人の船を護衛して阿嘉に戻る。船内では神人が〈かりゆしの歌〉を歌い続ける。

阿嘉に戻った青年は、前の浜で待っていた島の長老たちの前で〈三句〉を歌い、この後ウフガーの水をかぶって清めて終わる。ちなみに現在は、神人の船は村の動力船でハーリーは手漕ぎであるため、ハーリーは港の近くで7回回った後は、青年も神人の船に乗り移り、ハーリー船を引っ張っていく。

・カシチー（旧6月25日）

六月ウマチーの10日後、ヌンドゥルチにおいてカシチーが行われる。これは稲の収穫をヌンドゥルチに報告し祝う儀礼と思われる。前日24日に根神、脇神人、ヤジクらが総出で神酒を4樽作る。神酒の作り方は六月ウマチーに同じ。当日午前中にはウチャナクを作る。ウチャナクは米をひいた粉を水に漬けたのち、丸めて蒸す餅である。

祭は大きく分けて4部分から成る。

1. 初めにヌンドゥルチの宮の中で、嶽々宮々の香炉の前に、酒、ウチャナク、神酒を供え、小声で祈る。次にヌルの香炉の前で同様の事をする。
2. ヌンドゥルチ家に移動し、香炉とグシندانの前でそれぞれ同じ事をする。
3. ヌンドゥルチ宮に戻り、嶽々宮々の香炉の前、ヌルの香炉、再び嶽々宮々の香炉の前で同じことをする。この時はウチャナクは供えない。
4. ヌンドゥルチ宮の前庭に出て、〈ウムイ〉〈デーサカズチ〉〈ミキウムイ〉を行う。所作等は六月ウマチーに同じ。ミキやウチャナクを分配して終わる。1. 2. の部分はシリガフーといい、これまでの一年間の願を解き感謝する意味、3. 4. はこの先一年の無事を祈願する願立ての意味があるという。^(注55)

・タナバタ（七夕）（旧7月7日）

各家では墓掃除をし、この日から仏壇に水を供えて、「ソーロー水うさぎますから、どうぞいらして下さい」と祖先を招く。盆の前日までに仏壇や位牌もきれいにしておく。^(注56)

・盆（旧7月13日～15日）^(注57)

13日はウンケーと称し、この日から御飯を仏前に供える。13日朝はアワメー（粟米）、茶、水、おかず（肉、こんにゃく）、昼は茶、水、ミンブトゥケーのあえ物（スクを3匹載せる）、餅など。

14日は朝はジュージー、昼はダグ（団子）（餅を細かく切って黒砂糖汁に入れる）と汁そうめん。

15日はウークイと称し、ウブク（赤飯）とテンプラを出す。夕方になると

線香をもって親戚まわりをする。24時になると一斉に先祖を送る。ウチカビを焼き、先祖があゝの世にたどり着くまでによって来る亡者への施餓鬼として、バナナ、ターンムなどの切れ端でできたミンヌクを仏壇下に置いておく。また、送る時、アダンの実を玄関から勢いよく投げる。これはあゝの世までの乗り物という。

• 獅子舞 (旧7月15日)^(注58)

ウークイの日、午後8時ころからヌンドゥルチ家の庭で獅子舞が始まる。獅子舞は青年団がやる。三味線、太鼓の上手な人が伴奏し、盛り上げる。獅子頭は普段はウルンメー (御殿前) にしまっているが、この日の早朝出して、ウフガーの水で清め、ヌンドゥルチに置いておく。夜、獅子頭はヌンドゥルチのあと、フウガーを初めとする村の井戸、村境などを巡り、厄祓をする。これをスージミグイという。^(注60)

• ヤシキウガン (屋敷御願) (旧8月上旬、シバサシ以前)

各家ではヌルに頼んで、屋敷に魔物が入って来ないように、家内安全を拜んでもらう。8月に入って、シバサシの前日まで (1週間くらい) の間に、島のすべての屋敷御願をやる。^(注61)

• シバサシ (旧8月9日)^(注62)

8月は魔物の出る月であるため、シバを差し魔物を払う。当日の昼間にギシキ (ススキ) を取って来て、夕方家の門、角などに差す。10日の未明に差す家もある。また、差し方は、まっすぐのまま差す家と、先端を丸く結んで差す家がある。まっすぐ差した家は、2、3日たつと、先端を結ぶ家もある。この日から8月15日まで、毎日夕暮れ時にホーチャク (爆竹) を鳴らして魔物を追い払う。

• ハチグッチウマチー (八月ウマチー) (旧8月10日)^(注63)

次第は、二月、五月ウマチーと同じ。カーカスは作らない。また神酒はクシ、ウーシムで少量作るのみ。^(注64)歌われるのは〈ウムイ〉のみ。ただし、六月ウ

マチーと同じく、根神は頭にハナを被る。ハナは六月ウマチーの時と同様に、早朝、草とりをして作る。参加者は、神人、区長ほか数名の議員。祈願の内容は、大風（台風）が来ないように、また航海安全・島内繁栄などであるとい^(注65)う。殿で行われる儀式のことは「ウチマー」と言うが、この日のことを「ウイミ（折目）」と呼ぶこともある。^(注66)

・シマヌウガン（島御願）（旧8月12日）^(注67)

ヌンドゥルチ宮に神人が集まり、島の安全と繁栄を祈る。正月3日にやるシマヌウガンと同じという。また、6月25日のカシチーとも儀式の次第が似ている。午前中にウチャナクを作る。

儀礼は大きく分けて次の4つの部分から成る。

1. 初めにヌンドゥルチの宮の中に置いて、嶽々宮々の香炉の前に、酒、餅、菓子を供え、小声で祈る。次にヌルの香炉の前で同様の事をする。
2. ヌンドゥルチ家に移動し、香炉とグシندانの前でそれぞれ同じ事をする。
3. ヌンドゥルチ宮に戻り、嶽々宮々の香炉の前、ヌルの香炉、再び嶽々宮々の香炉の前で同じことをする。この後ヌルのみの拝みがある。
4. ヌンドゥルチ宮の前庭に出て、〈ウムイ〉と〈デーサカズチ〉を行う。所作等は六月ウマチーに同じ。この後、祝いの日であるので、〈三句〉〈かりゆしの歌〉を歌う。

・ジュウグヤ（十五夜）（ツィチナガミ（月ながめ））と獅子舞（旧8月15日）^(注68)
午後8時ころに神人らがヌンドゥルチ宮に集まる。〈三句〉〈かりゆしの歌〉を歌い一人ずつ舞う。また、各々重箱を持参し、食べる。

一方、同じ頃青年団はウフンジョーンに座を設け、獅子舞を始める。途中でヌンドゥルチを訪れ、区長から杯をもらい、舞う。この後、獅子は7月15日と同じく、島内の井戸、村境を回り、祓をする。新築の家も回る。

・ウミノウガン（海の御願）（日取り）^(注69)

十五夜の翌日または2日後に日取りをして行う。海の神に対する感謝と祈

願、魚に対する供養の祭で、イビヌメーで行われる。神前にはカーカスが供えられる。^(注70)

ウマチーでは前日にアミジケーで魚を取ったが、ウミノウガンでは当日の早朝（8時ころ）に取りに行く。午後2時ころ魚が前の浜に着き、ウマチーと同じように捌いたのち、イビヌメーでいぶしてカーカスにする。

午後5時半ころより祭が始まる。まず酒、カーカスを神前に供え、神人たちがイビの神の香炉に向かって祈願する。こののち、神人は参会者も含めてイビの宮の前にコの字に並ぶように座り方を変える。区長と根人が神人らと杯をかわす。神人がウミノウガンの〈ウムイ〉を歌う。

この後、刺身、カーカス、酒などを皆でいただく。男性は三味線と太鼓を用意し、古典音楽の〈かじゃでい風〉に続き民謡を歌う。女性、男性が興に乗って踊る。

神人は早くに退席するが、男性は遅くまで残って歌や話を楽しむ。

・タキヌブイ（嶽登い）（日取り）^(注71)

海の御願の翌日または翌々日に行う。この一年の願をほどこき、また次の一年の願を立てる。忌中以外の全村人は餅の重箱とおかずの重箱を持参しそれぞれの所属する嶽に登る。阿嘉の全戸は大嶽、中嶽、クボー嶽のどれかに属している。朝、9時前に出発する。かつては歩いて行っていたが、現在は途中まで車でいく。

クバの葉を敷物に使う。まず、嶽の宮の前に酒と餅（ウチャナク）を供え、神人がこの一年の願を解く。線香は24本（「ニジュウシヨウ（二十四香）」という）たてる。これをウシリガフーという。こののち神人が宮のさらに奥の拝所へと行き、拝む。ここへは一般のムラ人は入れない。

神人が再び宮の前に戻って来る（往路とは異なった道筋で帰って来る）と、次におかずの入った重箱を供え、線香を12本たて、次の一年の願を立てる。これをタティウガンという。ここまで済むと、ちょうど昼になり、持参した重箱の料理を食べる。

その後〈三句〉、〈かりゆしの歌〉を神人が歌い、主な神人は踊る。また、男性が多いと三味線太鼓でにぎやかに盛り上がる。

現在は午後2時ころには家に戻ってくるが、車のない時代は1日仕事であったという。

- ハチグッチカーウガン（八月カーウガン）（日取り）

正月と同じく、宮々、井戸を神人が手分けして拝む。

- ミヤラニ（旧9月下旬）

メーダニ、ミャーダニとも。9月下旬に日を選んで行う。戦前まで、最も大きな祭であったタントゥイ（種取り）の名残の儀礼である。満61才に達した女性が、ヤジクまたはパーパータと呼ばれる一種の神人集団に加入するための儀礼である。^(注72) 規定の年齢に達してグスクに登りたいと希望する者は、まず米の粒をつかんで5粒または7粒だとグスクに登ることが許可される。当日、ヌンドゥルチに集まり、まず持参した重箱のご馳走をいただいた後、グスクに登る。その際、新参のヤジクはあらかじめグスクの森の中に隠れていて、皆が登ってきたところで紹介される。グスクには餅を持参し、タキヌブイと同じく、まず、餅を供えて願を解いてから、次にタティウガンをする。次に〈三句〉を歌い、一人ずつ踊る。^(注73)

- ウシンゴ（日取り）

グスクに登った日の夕方から1週間ウシンゴが行われる。新しくヤジクになった人を含め、神人は毎日夕方にヌンドゥルチ宮に集まり、祈願する行事である。^(注74)

ウシンゴはタントゥイ行事の中の一つの儀礼で、稲種をつけてソダネが育つまでの1週間、豊作の祈願をしたことに由来する。^(注75)

タントゥイを見た人は、大正の中頃より以前の生まれの人で、当時は神様をじかに見てはいけなるとただただひれ伏したという。^(注76) 昭和5、6年まで続いたと思われる。

- ソジフニユエー（出船祝い）（日取り）

現在はウシンゴの最後の日に行う。ヌンドゥルチで〈三句〉を歌い、海が

静かになるよう祈る。翌日、ヌンドゥルチに再び集まり、魚のテンプラなど作って祝う。タントゥイが行われていたころは、タントゥイの翌日にンジフニユエーは行われた。タントゥイの日に降臨した神がこの日に船に乗って帰っていったという。^(注77)

- シマクサラサー（旧9月下旬、タントゥイの前）

現在は行われていない。古くは、集落に入って来るヤナムンをさけるために、豚をつぶした血をギヌチュの葉につけ、家の角々に差した。肉はユーナの葉に載せて皆に配った。^(注78)

- フーチゲーション（旧9月または10月頃）

現在は行われていない。公民館がまだなかった時分に、その場所で山羊をつぶして神人らが祈願した。一对の皿に山羊の肉を入れ、浜で航海安全、島内繁栄を祈った。^(注79)

- カママーイ（旧10月1日）

現在は行われていない。各戸では竈を清掃し、検査を受けた。竈がきたないとおしりを叩かれたりして注意された。^(注80) 毎晩午後10時と未明の3時、青年が二人ずつ火の用心を呼びかけて回った。^(注81)

- トゥンジーソーグッチ（冬至正月）（冬至の日）

トゥンジーソーグッチと称して、各戸ではターンムでジュージーを作り、火神、仏壇、床に供え、家族で食べる。^(注82) また、トーノウミフェーと称して、門松を立てて、根人が海の方を向いて拝んだという。^(注83)

- シリガフー（旧12月15～24日）

一年の無事を感謝して、火神、仏壇などに、酒、ご馳走を供える。12月1日よりヌルが一日10軒くらいずつ、全ての家を回る。ウチャナクとシチャグワンというご馳走の皿（2皿）を供え、拝む。^(注84)

- ・ウガンフトゥチ（御願解き）（旧12月24日）

一年の願が解かれる日で、餅、米、肴を火神、仏壇などに供え、シチグサン（シロカビを御幣のように切って竹に差したもの）を家の角々、7箇所^(注85)に差し、一ヶ年の無事を感謝する。シチグサンは拝みが終わると燃やす^(注85)。また、この日はヒヌカン（火神）が天に帰って地上の事を報告する日なので、火神の前に茶碗3つに赤飯を盛って供え、線香を7回焚いて送る。登る時はゆっくりなので線香を7回焚く^(注86)という。

5. ハマウリ行事概観

5-1 ハマウリの状況

ハマウリは、阿嘉集落において旧暦3月3日から4日にかけて女性達が海岸に出て楽しみ、集落を東西に分ける境界上で歌や踊りを競い合い、また集落中を踊り巡る行事である。

現在のハマウリ行事の状況を1992年4月5～6日（旧暦3月3日～4日）の実見データに基づいて以下の順で報告する。表2のハマウリ進行表を参照されたい。

- ・一日目夕方 ハマウリ→浜でのガーエー→
ウフンジョーシでのガーエー→東西遊び座
- ・一日目夜 東西遊び座での遊び
- ・二日目昼 東西遊び座→ヌンドゥルチ→道ジュネー→
総合センターでの遊び

また、一日目、二日目の集落内での移動の道順を図3、図4に示した。

- ・一日目夕方

午前中に各家では清明祭の墓参りを済ませ、夕方4時30分頃より女性たちが正装して三々五々前の浜に集まって来る。アガリ（東、シムンダカリ）とイリ（西、マタキ）と別々に浜にゴザを敷いて3間四方程の座を設ける。東西の境界はウフンジョーシから海岸に至る線である。各々住んでいる地域によって東西のどちらかに分かれる。結婚した女性は嫁ぎ先の居住区に属す。

表2 阿嘉集落浜下り（旧三月三日～四日）進行表

一日目

場所	東	西
浜	4:30 集合 神人に挨拶（重箱・盃） 5:00 三句～唐船ドーイ 境界に移動	4:48 集合 神人に挨拶（重箱・盃） 三句～唐船ドーイ 境界に移動
浜の境界	5:34 ガーエー（唐船ドーイ） 移動	
ウフジヨシ	5:40 ガーエー（唐船ドーイ） 移動	
ヌンドウルチ		5:46 唐船ドーイ 遊び座へ移動
遊び座	5:50 唐船ドーイ 6:00 解散	6:00 唐船ドーイ 解散
遊び座	8:20 集合 8:40 三句～唐船ドーイ 8:52 西使者が来る 西使者の踊り、献盃 唐船ドーイ（西使者～） 9:15 西使者帰る 東の人で遊び 解散	8:10 集合 8:30 三句～唐船ドーイ 8:45 使者2人を東へ送る 遊び（雑談） 9:35 使者が帰ってくる 遊び 10:30 解散

二日目

場所	東	西	神人
遊び座	1:00 集合 輪で踊り（唐船ドーイ） 1:30 移動	1:00 集合 移動	1:00 集合
ヌンドウルチ	1:40 到着 輪で踊り（唐船ドーイ） 唐船ドーイ 移動	1:45 到着	1:40 三句～唐船ドーイ 移動
ウフジヨシ	2:00 到着 ガーエー（唐船ドーイ） 移動		
イビヌメー	2:05 到着 輪で踊り（唐船ドーイ） ガーエー（唐船ドーイ） 移動		
総合センター	2:23 到着 輪で踊り（唐船ドーイ） 休憩 2:44 踊り（唐船ドーイ） 3:06 解散		

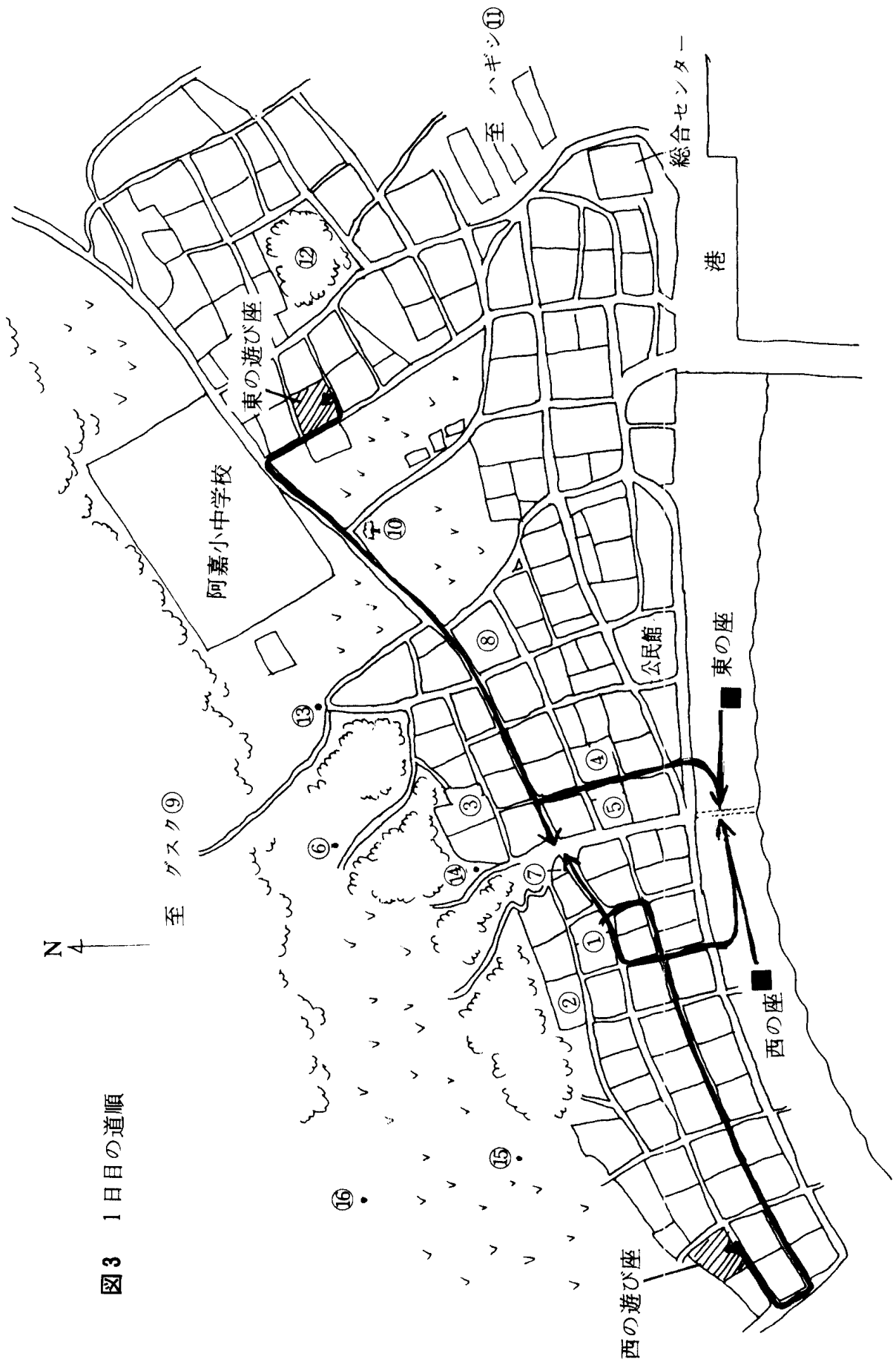


図3 1日目の道順

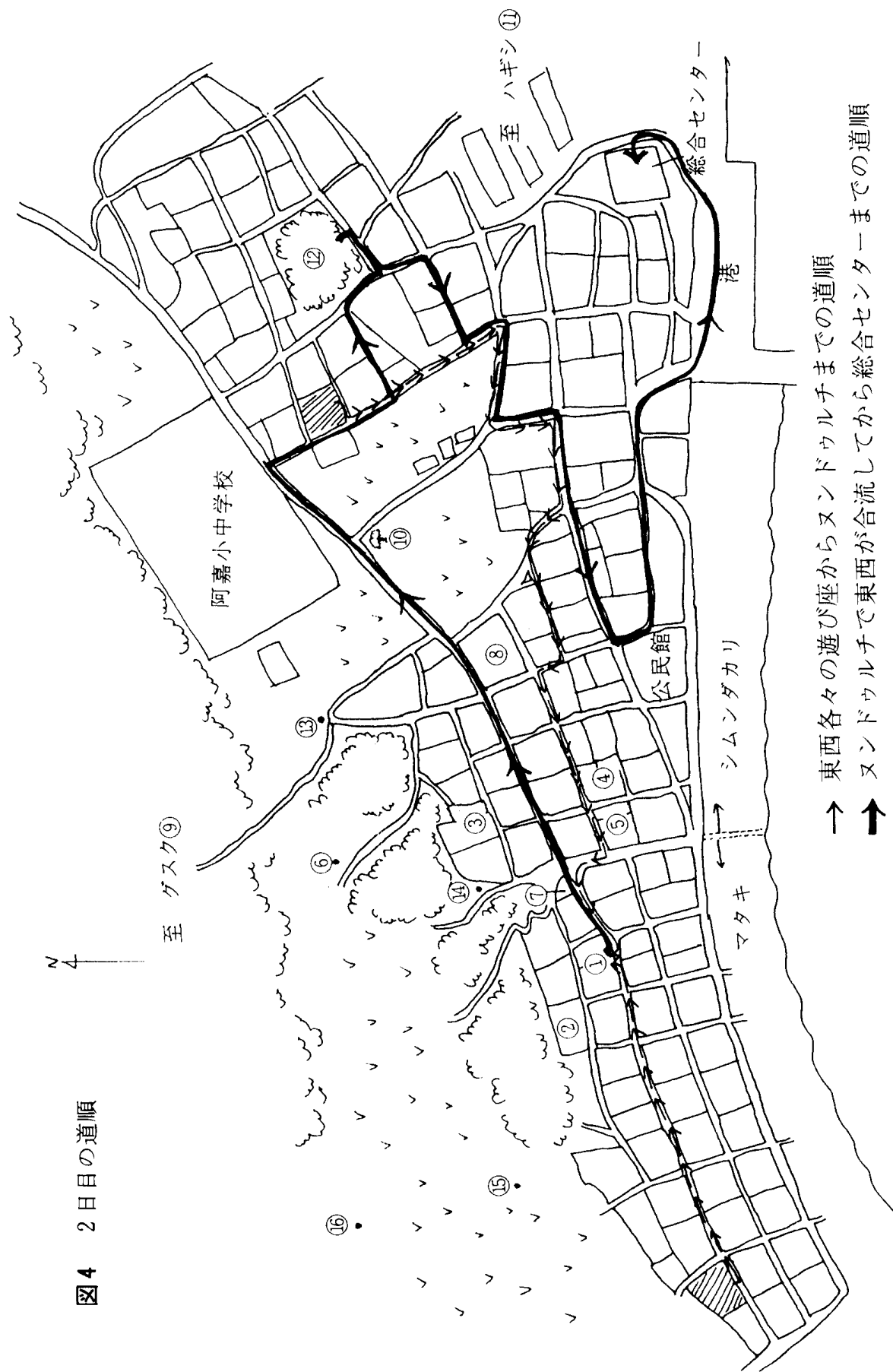


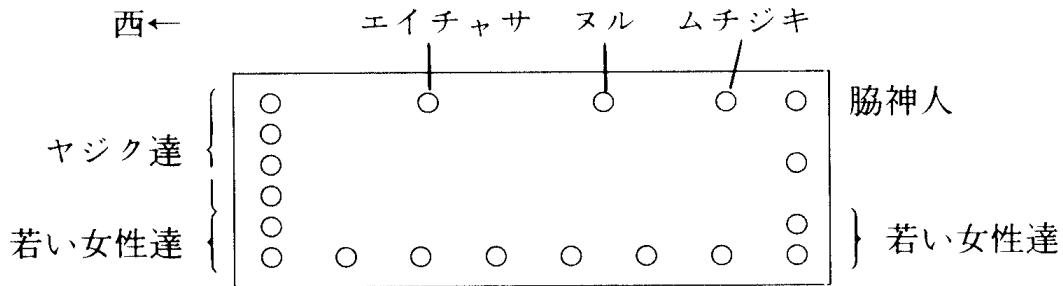
図4 2日目の道順

- 東西各々の遊び座からヌンドゥルチまでの道順
- ↑ ヌンドゥルチで東西が合流してから総合センターまでの道順

[東（シムンダカリ）の様子]

浜での座り方は、北東から反時計回りに根神、脇カミンチュ、ヤジク、その他の女性達（幼児連れてくる）（下図参照）。

東の浜での座り方



4時50分。20人程集まってくる（この時点で西はまだ4人しか集まっていない）。

5時。大人約20人、子供6、7人（西は10人程）。

5時10分。27人程になる。うち子供連れの若い母親が10人程。若い女性は座の東から南側にかけて座り、座の真ん中を空けている。子供連れの若い女性以外にはヤジク達より若い人は少ない。

神人は他の神行事のような白衣装ではないが、正装ということなので、普通の着物で来る人もいれば、他の神行事の時のように紺地のかすりを着る人もいる。若い女性はジーンズなどの普段着で、正装している人はいない。ヌルは黄地の着物で、他の根神、ヤジク達は紺地を着用している。

浜に下りると、まず、ご馳走をつめた重箱を持参し、根神に披露する。重箱の中身は奇数種類（だいたい9種類）と決まっているという。この一年に生まれた子供を持つ女性は「ハチウジャー（初お重）」をこしらえ、子供を抱いて参加する。島から出ている人も、この日にわざわざ子供を連れて帰島しハマウリに参加することもある。女の子は特に頭に赤いティサジをまく。

重箱の披露に続いて各人が根神に酒を勧め挨拶する。20cmほどの小盆に杯を二つ載せ、泡盛を注いで根神に捧げる。各根神は小盆を受け取り、一礼し、各々の杯を手にとって一礼していただく。その後小盆を挨拶に来た人に返したり、隣の根神に渡す。こうして各人が各根神に挨拶してゆく。この順は整列で

はなく、次々と根神達の周りに集まってくるので、根神達も次々と順不同にいたたく（写真1参照）。



写真1 東（シムンダカリ）浜での様子

5時15分から座の西側に座るヤジク二人が鼓を打ち始め、それに合わせて他の人は手拍子を打ちながら、根神、ヤジクが中心となって〈三句〉を歌い出す。歌詞三節分を歌って、テンポが速くなる部分（チリファと呼ぶ）を経過して〈唐船ドーイ〉に歌が変わる。鼓と手拍子のテンポが変わり、踊りが始まる。座の真ん中に一人二人と立ち上がって自由な手踊りを踊る。根神も踊る。〈唐船ドーイ〉は5分間続き、その間子供も含めて8人が次々と踊った。

5時25分。〈唐船ドーイ〉終わり（この時、西ではまだ〈唐船ドーイ〉を踊っている）。

その後また〈唐船ドーイ〉を歌い始める。ヌルも踊る。約3分間で5人踊った。

[西（マタキ）の様子]

4時50分。集まっているのは4人。

4時58分。大人13人、子供1人。脇神人や80才過ぎの女性は紺地や黄色の

紅型を着ているが他のヤジク達は洋服である。ちなみに、現在西に属する根神はいない。

5時。ヤジクの人達が、脇神人に酒を勧める。

5時07分。大人約30人、子供5、6人集まっている。各々持参した重箱を神人に見せたり、互いに披露している。

5時20分頃、〈三句〉を歌い始める。太鼓は二人。続いて〈唐船ドーイ〉となり、一人ずつほぼ全員踊る。

5時31分。全員立ち上がって輪になり、その場で9人程、時計回りに4回ほど回る。

5時34分。一同太鼓を叩きながら東西の境界線に向かう。

[浜、ウフンジョーションでの東西ガーエー]

5時30分。東西に分かれていた女性達が、浜の境界線まで移動を始める。東（シムンダカリ）では、まず一同が座から立ち上がり、ヤジク達が中心となって座の西側で鼓を打ちながら反時計回りに数周回った後、〈唐船ドーイ〉を歌いながら列になって東西の境界線に向かう。境界には東の方が先に到着して、西の到着を歌いながら待っている。

5時34分。西（マタキ）の一行も鼓（二人）を打ち〈唐船ドーイ〉を歌いながら境界まで行列で歩いてくる。頭には色鮮やかなサージを巻いている人もいる。境界線を境にして東西が向かい合い、東西が各々勝手に〈唐船ドーイ〉を歌いながら、カチャーシー踊り（自由乱舞）のガーエー（競い合い）が始まる。太鼓も相手側を挑発するように一歩前に出て叩く。3、4分続けた後、各々の座の方にいったん引き返した。ガーエーの参加者は東約10人、西約10人。^(注87)この周りに子供達を取り巻いている。

5時40分。次に東西各々の道筋で太鼓を叩きながら行列してウフンジョーション（図3参照）まで場所を移す。

ウフンジョーションには東が先に着いている。西の一行がヌンドゥルチの方角から行進してくるのを、太鼓を連打し〈唐船ドーイ〉を歌って待ち受ける。東西とも5、6名ずつである。ウフンジョーションの広場の溝を東西の境にして再び踊りのガーエーを繰り広げる（写真2参照）。周りには子供達が15、6人集まっ

ている。互いの側からめいめいカチャーシーのように自由に踊りながら、相手側につかみかかったり、相手のサージを取り上げようとしたりする。最後には赤ん坊を抱えた若い婦人も踊りに参加し、約5分ガーエーが続いた。



写真2 ウフンジョーシでのガーエー

[東西のアシビジャー（遊び座）への移動]

この後、女性達は東西に分かれ、それぞれに設けられたアシビジャー（遊び座）へと移動する（図3参照）。西の人々はそのまますフンジョーシの宮に膝をつき、手を合わせて挨拶してから立ち退く。

東の1992年の遊び座は屋号イーバルグラー（上原小）（上原栄二郎氏宅）。遊び座は毎年変わり、東西それぞれで最近新築された家を選ばれる事が多いが、別にそう決まっているというわけではない。新築の家になることが多いのは、踊りをすることがカリー（嘉例）をつけることになるからということだ。

5時46分。東の一行は歩いて遊び座に向かう。道々太鼓（二個）を叩き手を打って進む。

遊び座の家に一行（この時点で6名。この中には根神はいない）が到着すると、まず座敷に上がって太鼓を打ち、輪になって反時計回りに回りながら唐

船ドーイ〉を2節分歌った。この後座敷に輪になって座り、太鼓を叩きながらまた〈唐船ドーイ〉を歌い、一人ずつ輪の中に進み出てカチャーシー踊りを約6～7分間繰り広げた。後からヌルも訪れ、最後には7人になった。

西の1992年の遊び座は屋号ノザキグラー（野崎小）である。

5時46分頃、西の一行はヌンドゥルチに着く。一礼してから、輪を作って時計回りに回る。その後、内側を向き、一人ずつ踊る。一遍に2人くらい踊ることもある。子供5、6人がついて来る。こっけいなしぐさも交える。5分くらい踊って終わる。一礼してヌンドゥルチを去る。ヌンドゥルチから遊び座までの道は、いったん南へ行き、クシ小の角を西に折れ、つきあたりまで行く。新垣小をぐるっと回って西から野崎小へ入る。太鼓を打ち、歌を歌いながら道行きしてゆく。

5時55分。遊び座（ノザキグラー）に7、8人来る。〈唐船ドーイ〉を歌いながら座敷に入ってきて、初めは時計回りにぐるぐる回る。いったん座ってくつろぐ。全員、名前と年を言って大笑いする。

6時頃。〈唐船ドーイ〉で一人ずつ踊る。5分くらい踊った後、夕食のためにいったん解散する。

・一日目夜

[東のアシビジャーの様子]

夕食を済ませた後、女性達は、夜8時ころから再びそれぞれのアシビジャーへ集まる。

8時20分。遊び座（上原小）にヌル、ムチジキ他10名集まっている。お茶を飲みながら歓談を続ける。一同普段着に着替えて来ている。

8時28分。14名程になる。ヌル、ムチジキは座敷の東側に座っている（床の間は北側）。

8時30分。女性の一人が根神から順に、座を時計回りに皆に盃（泡盛）を勧めて回る。

8時40分。一同、座り直して〈三句〉を歌い始める。太鼓はヤジクの二人が務める。席順は座の東側に北から脇神人、ヌル、ムチジキ、脇神人、北側の床の間から西側にかけてヤジク達（太鼓二人含む）、南側にその他の女性達が

座る。

〈三句〉からそのまま〈唐船ドーイ〉に移行し、歌と手拍子の中、一人二人と座の中央に出て踊る。次々と様々な歌詞を歌い出して7分間程続ける。その間、二人で向かい合って手を繋いで踊ったり、こっけいな仕草の踊りを見せる人もいる。

8時52分。西からの使い2名がビンシー（瓶子）二本、杯、たたんだ風呂敷の載った盆を持って東のアシビジャーを訪れる（写真3参照）。これはヌルに対して、明日も宜しく願いますという挨拶の意味であるという（ヌルが西に住んでいれば、逆に東から西へ使いが立つということである）。

今回訪れた西からの使いのうち、一人は脇神人、一人はヤジクである。使いには普通、機転が利いて踊りの上手な人が選ばれるという。二人の使いは紺地を着、頭には桃色のサージを巻いている。東の人々の手拍子、太鼓に促されて二人は踊りを披露する。使いの一人（中村千代氏）が、まずヌルから持参したビンシーで酒を捧げる。根神、脇神人、ヤジク、その他の人々の順に酒を注いでゆく。一本のビンシーで一人二回注ぐ。^(注88)一週り注ぎ終わると、西の使いに酢の物がふるまわれる。



写真3 西の使い

9時7分。しばらく雑談の後、東の人々の〈唐船ドーイ〉の歌と太鼓、手拍子に促されて西の使いが踊りを披露する。西の使いは踊りにこっけいな仕草も交えながら座を盛り上げる。東の人々も次々と踊りに立つ。踊る人は前の人からサージを手渡され、頭に巻いて踊る。その中には西の使いに挑み掛かるような仕草を見せる人もいる。西の使いは、最後にはどじょう掬い踊りも披露して、座は大爆笑となる。

9時18分。「今日のご苦労様、明日も宜しく」とお互いに挨拶を交わした後、西の使者は西の遊び座に引き上げる。西の使いが帰った後も、アシビジャーでは夜更けまで踊りやおしゃべりに興じた。

[西のアシビジャーの様子]

8時11分。遊び座に3、4人集まっている。

8時30分。7人くらい集まる。〈三句〉を歌い始める。太鼓は二人（兼島ウメ氏、嘉手納やす氏）が叩く。続いて〈唐船ドーイ〉（1回目）を歌う。2回目の〈唐船ドーイ〉で、みんな踊る。

8時45分。東への使い（中村千代氏、当間トミ氏）が紺地を着て、サージ（ハチマキ）をして東のアシビジャーに立つ。みんな「いってらっしゃーい」と声をかける。二人はビンシーを持ち、「いってきまーす」といって車に乗り込む。西のアシビジャーでは送り出すように太鼓を連打する。

8時52分。東の遊び座に着く。二人は拍手で迎えられる（東のアシビジャーの様子の項参照）。

9時18分。西の使者は東の遊び座から引き揚げる。

9時35分。西の使者が西の遊び座に帰ってくる。道順は昼間と同じで、西から入る。車を降り、〈唐船ドーイ〉を歌いながらアシビジャーに入る。アシビジャーの人々も〈唐船ドーイ〉を歌いながら迎える。使いの二人に「ごくろうさま」といって酒を勧める。次に使いの一人が逆に皆に酒を勧める。

この後、〈ストン節〉、〈唐船ドーイ〉、昔の民謡、〈唐船ドーイ〉、小学唱歌などが次々と歌われて、10時すぎまで盛り上がる。

10時30分。解散する。

・二日目東、西、神人の進行状況

翌日、3月4日も踊りをする。午後1時ころ神人はヌンドゥルチに集合し、^(注89)神様にシーミー、ハマウリなどのことを報告する。それ以外の女性達は、昨晚と同じ東西各々のアシビジャーに集合し、仮装してから、道行きをしながらヌンドゥルチへ集まり、ヌンドゥルチの庭で輪を作って踊る。

次にウフンジョーンに座を移し、東西のガーエーをする。小中学校の前を通

り、イビヌメーへ行き、ガーエーをする。最後は新しくできた阿嘉離島開発総合振興センターに行き、一人ずつ踊ったのち、一服して解散する。以下に時間経過を追って、東、西、神人と区別して進行状況を記す。

(東)

1時26分。昨日と同じ遊び座に集合する。9人くらい集まり、皆様々に滑稽な仮装をしている。遊び座の座敷で反時計回りに輪になり、三周くらい回る。

1時30分。一同太鼓を打ちながら外に出る。ヌンドゥルチまで約10分かけて道行きする。〈唐船ドーイ〉を歌い、太鼓を打ちながら進む。太鼓以外の人には手拍子を打つ。

1時40分。ヌンドゥルチに到着する。庭を反時計回りで二周くらい回る。

(神人)

これより先にヌンドゥルチの宮の中には神人、ヤジクラが集まっている。神人らは滑稽な仮装はせず、紺地の着物や普通の着物などを着ている。

1時43分。神人らが香炉に向かって祈る。

1時45分。神人らが〈三句〉を歌う。

(西)

〈三句〉が歌われている途中で、西の一行がヌンドゥルチの庭に入ってくるが、宮の中では〈三句〉を歌っているのので、東の一行とともに庭で静かに待つ。

(神人)

1時47分。宮の中では〈唐船ドーイ〉が歌われ、神人らが手踊りをする(写真4参照)。

(東・西)

ここで、庭にいる西の一行は太鼓を叩いて庭をぐるぐる回る。二周くらいしてから手踊りとなる。西の人も東の人も踊る(写真5参照)。手踊りの時は、皆で輪になり、内側を向いて、踊る人が一人または二人ずつ輪の中に進み出て踊る。この時、宮の内と外の太鼓は同じリズムで打たれるが、歌詞は各々勝手に違うものを歌う。



写真4 ヌンドゥルチ宮での踊り



写真5 ヌンドゥルチ庭での踊り

(神人、東西)

1時52分。宮の内外ともに歌が途切れる。

1時53分。再び宮の中と外で〈唐船ドーイ〉が始まる。宮の中の神人達は5分くらい踊って途切れる。この後休憩してから、港のそばの総合センターに移動する。東・西の一行は2、3分踊ってから、一緒にウフンジョーションに移動する。東西ともに5、6人ずつの一行を区長が日の丸の旗をもって先導する(写真6参照)。

1時56分。ウフンジョーションに到着。東西でガーエーする。

1時59分。次の場所に向かって移動を始める。道行きは太鼓を叩きながら、〈唐船ドーイ〉を歌う。



写真6 集落内の道行

2時4分。阿嘉小中学校の前を通りかかり、校門の前で1、2人踊る。

2時7分。イビに到着。東西交って一列になり、鳥居から入る。そのまま輪を作り、反時計回りに二周くらいして止まる（写真7参照）。イビの宮に一礼して、東西に分かれて列を作る。すぐに〈唐船ドーイ〉の歌で踊りになる。一人または二人ずつ列の前に出て踊る。時折相手の頭をひっかいたりするガソーもされる。

2時17分。次の場所である総合センターへと移動する。

2時23分。総合センター着。室内で東西交って輪を作り、回る。2、3分、手踊り（〈唐船ドーイ〉）をする。センターにはすでにヌンドゥルチから神人らが移動ってきていて、回りのテーブルに座っている。

2時25分。休憩。全員テーブルについて休む。

2時45分。〈唐船ドーイ〉（1回目）で踊る。神人、普通の人、東西などの区別なく、踊りたい人が一人または二人ずつ出てきて踊る。後の人はテーブルについて手拍子ではやす。ガソーや滑稽なしぐさが出て、大いに盛り上がる（写真8参照）。

2時58分。全員一服する。



写真7 イビでの踊り



写真8 総合センターでの踊り

2時59分。〈唐船ドーイ〉（2回目）で踊る。

3時5分。全員で万歳三唱して終わる。万歳はこの年はたまたま出た。毎年必ずあるわけではないという。一同解散する。

5-2 ハマウリの今昔

かつてのハマウリは島の若い女性の多くが参加していた。また、男性も参加していた。ただし、女性と座は別に設け、分かれて座っていた。また4日の女性達の余興も、公民館の所に舞台をこしらえ、東西に分かれ（戦後の一時期は7班に分かれ）それぞれ出し物（古典や雑踊り）を演じていた。演目は〈御前風〉〈鳩間節〉〈ステトン節〉〈スーリアガリ〉〈谷茶前〉〈上り口説〉〈下り口説〉〈四季口説〉などかなりの数にのぼった。これらの踊りは那覇から嫁に来た人などに習ったという。地方は島の男性で三味線が上手な人が務めた。踊りの練習は約1カ月前から毎晩のように行われた。出し物については当日まで絶対に秘密で東西の対抗心は今とは比べものにならないほど激しかったという。

〈唐船ドーイ〉で行われる東西のガソーも今よりはるかに激しかったようである。

練習の期間、味方の青年たちは踊りの練習を覗きに行ったり、魚を取って来て女性たちにあげたりした。また、女性たちも青年が集まって遊んでいる場所に行き、踊りを披露したという。

また、5日は遊び座の片付けとして、畳を干したり清掃を行ったが、その折にも畳の上で踊ったりした。「三月アシビはイナグぬアシビ」といって、この期間^(注90)はどんなに夜遊びしても親に叱られなかったという。

現在のハマウリは神人、ヤジクなど年配の女性が中心で、それに幼児のいる若い女性が加わっている。若い女性達は自ら参加して楽しむというよりは、自分の子供を祝福してもらおうという意識であるらしく、浜でのゲーエーが終われば、夜の遊び座での饗宴や、翌日のムラ内の道ジュネー（巡行）にはほとんど参加しない。

このような現在の状況について現在のハマウリに参加している年配の女性達の誰に聞いても、彼女達が若かった頃のハマウリの盛況ぶりに比べると、現在のハマウリは寂しい限りだという感想が返ってくる。彼女達にとってハマウリ

とは、島に生まれ育った若い女性がこぞって参加する華やかな女の為の行事であった。彼女達は、女性の年に一度の華やかな遊びとしてのハマウリを体験しながら島の共同体における一人前の女性として認められ、自覚し、成長してきた。彼女達にとっては、盛大だった昔日のハマウリの記憶が、シマに暮らし続けてきた自らを位置づける刻印としての役割をになっている。しかし戦後以降に生まれ、現在島で暮らす若い女性達にはこうしたハマウリへの熱狂も思い入れも引き継がれてはいない。

このハマウリに対する世代間の意識の落差の背景には、戦前から今日までの産業・生活形態の変化とそれに伴う人口の変化が要因としてある。戦前の生活では島に生まれた女性達は原則として島内で暮らした。しかし太平洋戦争（沖縄戦）、アメリカ統治、日本復帰と移り変わる世相や、日本の高度成長に伴う急激な生活様式の変容の結果、現在では島の中学校を卒業すると殆どの子供は島を出、多くはそのまま島には帰らず、生活の場を本島や内地に求める。島に生まれた人々と共同体との関係の変化によって、ハマウリが持っていた共同体への参入儀礼としての意味も、次第に受け継がれなくなってきたのである。

現在の浜下り行事は、今なお参加している女性達が心に暖めている昔の華やかな思い出に支えられて存続しているといえる。浜下りを含め他の多くの行事に対する記憶（彼女達が人生の途上で育んできた）が、いわば過去から現在を支えているのである。そしてそれが、現在島に生きる人々の自分達らしさを表わすしるしともなっている。もっとも他所から訪れて見学する筆者らにとっては、阿嘉の女性達が二日間にわたって繰り広げる熱狂的な歌と踊り、そして爆発的な笑いと喜びのエネルギーの印象は強烈で、この行事の持つ意味に思いをめぐらせずにはいられない。

5-3 ハマウリ行事の考察

ここで阿嘉島のハマウリ行事の意味について考えてみたい。阿嘉のハマウリには大きく分けて次の三つの要素が含まれている。

- (1) 清め・厄払いまたは島内安全、健康祈願としての浜下り
- (2) 女の遊びとしての浜下り
- (3) 東西の競い合い

阿嘉の年中行事の中で、これらの要素を持つハマウリはどのような位置にあるのだろうか。また沖縄の他地域の関連行事とはどのような関連にあるのだろうか。

(1) 清め・厄払いまたは島内安全、健康祈願としての浜下り

阿嘉の年中行事はその参加者によって神人レベル、家（または門中）レベル、集落レベルの行事に大きく分けられる。年頭御願、ミヤラニなどは神人のみの行事、正月十六日、清明、盆、嶽登りなどは家または門中レベルの行事、ウマチー、島の御願、海の御願などは神人を中心として村の多くの人々が参加する集落レベルの行事である。ハマウリは女性を中心とする行事ではあるが、神人から一般の女性、子供達まで参加するということで集落レベルの共同体行事といえよう。

しかし、他の集落レベルの行事と異なり、浜下りにおいては神人は穀物の豊作や大漁祈願といった明確な目的をもって神に祈願する行為は見られない。この点、麦または稲の豊作祈願と感謝の意味を持つウマチーや大漁祈願のウミスウガン（海の御願）、餅を供えて願を解き、重箱を供えて願を立てるシマヌウガン（島の御願）とはまったく異なる。重箱を神人の前に披露し、祝福してもらう行為は、ハマウリの一日目（浜での）にも見られる。しかし、シマヌウガンなどのように、線香を焚き、餅を捧げて願をほどこき、重箱を捧げて願を立てるようなことは行わない。根神を始め脇神人、ヤジクが参加し、人々から敬意は表されるが、身を清める行為としてのハマウリを人々と一緒に参加し、享受しているといえる。神人が差し出された重箱に対してなにげなく合掌する際の意識をあえて明言化すれば、それは、浜に降りることによって身のけがれをはらい、その結果一年間健康で、島内が安隠であるようにということである。

この、阿嘉のハマウリの一日目、浜での行事は、奄美から宮古・八重山にまで南西諸島全域に広がる除厄儀礼としての浜下りの一環と見ることができであろう。^(注91)ただし阿嘉では渚には足を踏み入れない。現在は女性が海岸に一堂に会し、楽しい一時を過ごすか、かつては阿嘉では男性もハマウリをしていたという。したがって女性の行事という性格は、むしろ後述(2)の部分に表れている

と考えられる。

また新たに生まれた子供を参加させ、神人に重箱を披露するということで共同体から承認してもらおうという、共同体の成員となる通過儀礼的な要素も含んでいるといえる。

(2) 女の遊びとしての浜下り

ハマウリで次に重要な要素は「女の遊び」の要素である。集落の行事のほとんどは女性神人が中心となって行われる。その意味ではほとんどの行事は女性が主役ともいえる。しかし、これらの祭においては、女性たちは常に、夫、子供、そして集落のために祈るオナリ神としての役目を果たすことが第一の勤めである。これに対し、ハマウリにおいては神人だけでなく島のすべての年令の女性が主役たりえ、しかも踊り遊ぶことに大きな意味がある。すでに述べたように、この日ばかりは親兄弟のゆるしを得て、どんなに遅くまで歌、踊りに興じてかまわなかったのである。

阿嘉のハマウリでは、一日目の夕方から、女性達が遊び座を設けて女だけで遊び過ごす。そして一日目から二日目にかけて道ジュネー、つまり歌い踊りながら集落内を練り歩いてゆく。この点は、沖縄中南部に広がる三月アシビ、サングッチャーの習俗と共通していると考えられる。

旧那覇の末吉では、三日から五日にかけて女性達がアンビヤーや屋外で歌や踊りに遊び興じた。^(注92) 識名や上間でも、ムラヤー、ムイヤーと呼ぶ広い座敷の家に婦女子が集まり、歌や踊りの練習をし、四日には道ジュネーといっ^(注93)て集落中を踊って巡った。その後またムラヤーの庭で終日遊び暮らした。浦添市近辺では、この日浜には降りず、女性達が村の大きな家に集まり、夜通し歌や踊りに興じた。^(注94) 宜野湾市字宜野湾では、三月三日をサングッチャーといっ^(注95)て、13才以上の女性がサングッチャー宿に集まり、スンサーミーやその他の歌舞を歌い踊って楽しんだ。

こうした地域では、浜下りという要素が欠落して、女の遊びという要素が行事の中心となっている。阿嘉のように前述(1)の要素である浜下りを伴うのと、これらのように浜下りがないという違いはあっても、ともに女だけで集まって歌や踊りを楽しむという風習では、阿嘉と那覇、浦添、宜野湾方面では共通していることがわかる。

(3) 東西の競い合い

阿嘉のハマウリにおいて、歌や踊りに一層の拍車をかけるのが東西対抗という要素である。綱引きやハーリー舟競技を持たない阿嘉において、このような東西対抗の原理が働くのは、ハマウリの女のゲーエーのみである。他地域においては綱引きやハーリー舟競技という男の競争には必ず女の歌や踊りがつき、男の勝負と別に女同士の競い合いがあるが、ここ阿嘉ではその女の競い合いの部分だけがそっくり三月三日のハマウリに場所を得て、繰り広げられている。綱引きなどではしばしば勝負の行方によって豊作を占ったりするが、阿嘉の女のゲーエーではそのようなことはなく、その意味では勝敗は最終的には問題とされない。二つに分かれてゲーム的に競い合うことで盛り上がり、共同体の統合性、求心力を高めることが目的なのである。

隣島の慶留間集落では、現在は行われていないが、阿嘉と同様の東西競合のゲーエーを伴うハマウリがかつて行われていた。^(注96) 近隣の座間味島の浜下りでは、阿嘉のように東西に分かれてのゲーエーは行われ^(注97)ない。ただし「流れ舟」といって、船を出してその舟の上で歌い踊り遊ぶ習俗がある。その時舟と浜との間でゲーエーが行われる。この「流れ舟」は、旧那覇市街の三月アシビでもかつて行われていた。^(注98) 舟に女性達が乗り込み歌や踊りに興じたが、他の舟と出会うと歌を掛け合ったり、水を浴びせ合ったりしたという。渡嘉敷島でも同じく三月アシビとい^(注99)って、舟に乗って離れ島に女性達が赴き、歌や踊りに興ずる。浦添市の勢理客、小湾では、この日小湾川河口南のグスクジョーという丘で、両集落の女性達が歌合戦を行^(注100)ったという。

このように近隣を見渡すと、阿嘉のハマウリのように一集落の中で東西に分かれてのゲーエーをするという要素は他には見られないが、三月三日に女性達が歌舞やゲーエーで競い合うという風習は、(2)の女の遊びの要素と共に広く慶良間諸島から那覇、浦添方面において見られ、阿嘉のハマウリもこうした流れの中の一つとして位置づけることができる。

この阿嘉のハマウリがもつ東西対抗という要素は、他地域の浜下り行事と比較するよりは、沖縄各地で行われる大綱引きとの関連において考察するべきではないだろうか。ゲーエーという競い合いは一般的に大綱引きでは欠かせない要素であるし、(2)において指摘した女性の歌踊りによる道ジュネーも多くの地

域で大綱引きにおいて行われている。本稿で取り上げてきた阿嘉集落だけではなく、沖縄中南部全域にまたがって、大綱引きに関わる歌や踊りの芸能と三月三日を中心とした行事（三月アシビ、サングウチャー）との影響関係を今後考えてゆく必要があると思われる。

以上阿嘉のハマウリ（浜下り）行事に関して、三つの要素を中心に他地域との比較を加えて見てきた。これらの要素は阿嘉固有のものではなく、各々沖縄各地域に広がっていることが分かる。ただ、これら三つの要素が、阿嘉集落においてはハマウリ（浜下り）行事という機会において融合しているところに独特の様式が表れていると見なせるであろう。

5-4 ハマウリの音楽的側面

ここでは、阿嘉のハマウリがもつ音楽的な側面に注目し、歌われる歌謡について考察してみたい。ハマウリは、前項で考察したような性格を持つ一方、行事の中において祝い歌を歌い、踊りのガーエーを行うという音楽芸能的な側面も色濃く持っているのである。

・三句

ハマウリ行事でまず歌われるのは〈三句〉と呼ばれる祝い歌である。「三句」は歌詞が三節歌われることによる名称で、その内容は行事に応じて異なる。旋律は男の歌う〈三句〉と女の歌う〈三句〉の2種類ある。男の〈三句〉は六月ウマチーのスクローイ儀礼やハーリー舟を漕ぐ時に、カネを叩きながら歌われる（後者は〈ハーリーの歌〉ともいう）。女の〈三句〉はハマウリ以外にニントウガン、シマヌウガン、十五夜、タキヌブイ、ミヤラニ、ンジフニユエーなど阿嘉の様々の行事で歌われる（以下単に〈三句〉という場合、女の〈三句〉を指す）。必ず2人でチヂンを打ちながら大勢で斉唱する。島の古老の中には〈三句〉のことを「クェーナ」と呼ぶ人もいる。^(注101) ウムイとは旋律、詞型とも異なり、使われる行事も異なる。いくつかの行事ではウムイの後に〈三句〉が歌われる（下の一覧参照）。

また、〈三句〉の後には必ず〈かりゆしの歌〉または〈唐船ドーイ〉が付いており、この時カチャーシーが踊られる。ハマウリでは〈唐船ドーイ〉が用い

られる。

ウムイまたは三句が歌われる行事一覧^(注102)

1月	ニントーウガン	年頭のウムイ (A)	
1月	シマヌウガン	ウムイ (B)	三句+かりゆしの歌
		デーサカズチ (C)	
2月	二月ウマチー	ウムイ (B)	
3月	ハマウリ		三句+唐船ドーイ
5月	五月ウマチー	ウムイ (B)	
6月	六月ウマチー	ウムイ (B)	
		デーサカズチ (C)	
		神酒ウムイ (C)	
		スクローイのウムイ (D)	男の三句
6月	カシチー	ウムイ (B)	
		デーサカズチ (C)	
		神酒ウムイ (C)	
8月	八月ウマチー	ウムイ (B)	
8月	シマヌウガン	ウムイ (B)	三句+かりゆしの歌
		デーサカズチ (C)	
8月	十五夜		三句+かりゆしの歌
8月	ウミノウガン	ウミノウガンのウムイ (E)	三句+かりゆしの歌
8月	タキノブイ		三句+かりゆしの歌
9月	ミヤラニ		三句+かりゆしの歌
9月	ンジフニユエー		三句+かりゆしの歌

〈三句〉の旋律はすべて同一で、テンポがゆっくりした部分と速い部分から成る(楽譜1参照)。速い部分を「ちりふぁ」という。^(注103)これとよく似た旋律が、^(注104)隣の渡嘉敷島阿波連で採集されている。〈嘉例の歌〉と呼ばれる歌で、旋律の骨格、シラブルの当たり方のリズム、ゆっくりの部分と速い部分(チラシ)か

ら成る点、「シターリ」というハヤシ詞などが同じである。また、祝いの席で歌われる点、この歌の後、カチャーシーになる点など共通点が多い。

さらにこれらと同系の旋律が首里に存在する。^(注105)〈旅歌〉と呼ばれる歌で、知人、縁者が旅立つ時に歌うやはり祝儀の歌である。ゆっくりの部分と速い部分から成り、旋律の骨格、言葉の当たり方が同じである。阿嘉の〈三句〉、渡嘉敷の〈嘉例の歌〉、首里の〈旅歌〉の3つの旋律の比較譜（ゆっくりの部分）を楽譜2に示した。これを見ると阿嘉と渡嘉敷の旋律はきわめてよく似ている。首里のものはそれを幾分簡略にした形になっている。さらに、言葉の当たり方を確かめるため、シラブルが当たる音符のリズムを比較すると楽譜3のようになる。三者とも、冒頭とハヤシの部分はいくぶん異なるが、歌詞の当たり方はほとんど同じであることがわかる。

以上の事実から、阿嘉の祝い歌〈三句〉は首里を中心として本島地方で歌われていた旅キューナと旋律的に同系で、なんらかの時期に慶良間に伝わってきたものと推測できる。

〈三句〉の詞型は、8 8 8 6の琉歌形式である。他地域に伝わる、音数律がやや不定で、対句が多いキューナとは別系統である。ゆっくりの部分で歌詞を3節歌い、速い部分では直前に歌った歌詞を繰り返す。内容は祝儀の歌詞と浜下りにちなんだ内容のものを取り混ぜて歌う。次のような歌詞を歌うが、厳格な順番は決まっていない。だいたい1から始め、2を歌ったら3に進み、4を歌ったら5に進む。

- | | | |
|---|------------|--------------|
| 1 | きゆぬふくらさや | (今日の誇らしさは) |
| | なうにじゃなたている | (何にたとえようか) |
| | ちぶでいうるはなぬ | (つぼんでいる花の) |
| | ちゆちゃさすさ | (露が差しているようだ) |
| 2 | だんじゅかりゆしや | (まことに嘉例は) |
| | いらりさしみせる | (選んで差しなさる) |
| | ふにぬちなとぅりわ | (舟の綱を取れば) |
| | かじやまとぅむ | (風は真臚だ) |

- | | | |
|---|-------------|--------------|
| 3 | まとうむかじたぼり | (真臚の風を下さい) |
| | せんどうしょしなしぐわ | (船頭をしているわが子) |
| | せんどうからふなく | (船頭から舟子まで) |
| | かりゆしでむぬ | (嘉例であるよ) |
| 4 | さんぐわちになりば | (三月になれば) |
| | くくるうかさりてい | (心が浮き浮きとして) |
| | いすじはまうりてい | (急いで浜に降りて) |
| | あしびぶしゃぬ | (遊びたいものだ) |
| 5 | くんどうさんぐわちや | (今度の三月は) |
| | うゆうえはじみしょち | (お祝い初め) |
| | やにぬさんぐわちや | (来年の三月は) |
| | ゆくぬうゆうえ | (来年のお祝い) |

・唐船ドーイ

ハマウリでは〈三句〉に続いてすぐに〈唐船ドーイ〉になる。やはりチヂンを打ちながら歌うが、〈三句〉の打ち方と異なり、1拍ずつの連打となる。旋律は沖縄に広く分布している〈唐船ドーイ〉で(楽譜4)、ここに三月遊びにちなんだ8886の歌詞を歌いこんでいく。歌詞は大きく分けて、①三月三日の行事にちなんだ内容、②他の行事にもひろく使われる祝儀の内容、③自分をほめる内容、④相手をけなす内容の4つに分けられる。①②はハマウリの祝儀の行事としての側面をよく表し、③④は東西で分かれて競い合うガーエーの側面を象徴している。歌詞の一覧は本文末の資料1にあげた。

おわりに

筆者が阿嘉島に通い始めて、今年で6年目になる。阿嘉島は人口300人に満たない小さな島で、全沖縄的に有名な祭もこれといってない。しかしだからこそ、人々のひそやかで篤い信仰がいまだに脈々と生き続けている数少ない島であるといえる。島の方々には、取材中に、何度も不躰にビデオカメラを回し、いろいろな質問をさせて頂いたが、数々の御無礼をおわびするとともに、心か

ら感謝申し上げます。目まぐるしく変わる現代社会の中で島の生活も大きく変質してきている。本稿が島の伝統行事の記録と理解の一助になることを願っている。

また、数々の現地調査および本稿をまとめるにあたっての資料整理には、沖縄県立芸術大学音楽学部音楽学科の学生・松村智郁子さんに全面的に御協力いただいた。ここに感謝申し上げます。

楽譜1 阿嘉の〈三句〉 1991年4月17日 東の遊び座での演唱

♩ = ca. 58

1. きーやぬふくーらーさーやーアー
 2. さーんぐーちーにーなーりーはーアー
 3. くーんとさーんくーちーやーアー

なーうーにーじーなーたーてーるー
 くーくーるーうーかーさーりーてー
 うーゆーはーしーしーみーしーちー

シターリー { ちーぶーてーうーるーウーはー
 いーすーじーはーまーアーうー
 やーにぬーさーんーンーくー

なーぬーウーリーちーゆーちーさーすーさー
 りーてーウーリーあーしーびーふーしーぬー
 ちーやーウーリーゆーくーぬーうーゆーぬー

(ちりふあ) サーサーサー ---へーイーヨ --- →(3番以後ちりふあへ)

♩ = ca. 130

さん --- くちや ヨサ うゆうれは じーみじち

ヨ やにぬ ---さん --- くちやー

ヨーササーゆくぬーうーゆーうゆうれ

ヨーカリユシサササーやにぬさん ---くちや ヨサ

---ゆくぬうゆーうゆうれヨ サウレウレウレウレに続く

*1 実音は1オクターヴ下。
 *2 +は太鼓を打つところ。ただし〈三句〉前半は第一節分のみ、「ちりふあ」は冒頭部分のみ記した。
 *3 は に近い。

楽譜2 〈三句〉系旋律比較譜

阿嘉
〈三句〉

き - ゆ ぬ - ふ、 - く - ら - さ - や - ア -

渡嘉敷
〈嘉例の歌〉

き - ゆ ぬ - ふ、 - く - ら - さ - や -

首里
〈旅歌〉

だ - ん じ、 - か - り - ゆ - し - や

な - う - に - じ、 - な - た - て - る -

な - う - に - じ、 - な - た - て - る

い - ら り さ - し - み - せ - る

シタ - リ - ち - ぶ - じ、 - う - る - ウ - は - な -

シタ - リ - ち - ぶ - リ - う - る - は - な -

う - に - ぬ ち - な と、 - リ -

ね ウリ ち --- ゆ - ち - さ --- す --- さ --- さ ---

ね ウネ ち --- ゆ - ち - た --- ぐ --- と --- さ ---

わ - か - じ - や - ま - と --- む さ - - -

さ - さ --- へ --- い - よ - -

さ - か り - ユ シ

- *1 阿嘉〈三句〉は比較のため完全4度下に移調した。
- *2 各曲とも細かなヴァリエーション等、一部を省略表記した。

楽譜3 シラブルのリズムパターン比較譜

阿嘉
〈三句〉

渡嘉敷
〈嘉例の歌〉

首里
〈旅歌〉

き ゆぬ ふく - り さ や

な うに じな な た ゑ る シタリ

ち ぶ ゑ う る は な めウリ

ち ゆら た く とさ サ

い ち

かり ユシ

首里〈旅歌〉は比較のためリズム単位を倍に拡大して記した。

楽譜 4 阿嘉の〈唐船ドーイ〉 1992年4月5日 浜(西)での演唱

$\text{♩} = c 180$

1. きん くち さにちの うー ー ヤ あかぞん へー てる
 2. また きー みー やー ら びー ぬ みちー いー ねー ぶー
 3. んあ ぬー うるぐち とん くり ぶ。 とんとんあ ヤ

うち がゆ る - ヨー イヤ ナ { あしでー うー
 た るー は - しむぬー みー
 - ちや - い - にぶいー す -

ちや がゆ る - また きぬ - え じ ま
 や - ら び ぬ つみ る - く や - る
 ん し ま に んち - ん さ - な

(注)
 アイサ セン スル - ちが ヤ 注 最後のハヤシは歌われない
 こともある。

資料1 東西の演唱歌詞例

東 遊び座（夜） 歌詞一覧

1992年4月5日 上原栄二郎氏宅（上原小）

<三句>

1. きゆぬふくらさや なうにじゃなたている
ちぶでいうるはなぬ ちゆちゃさすさ
2. くんどうさんぐわちや うゆうえはじめしよち
やにぬさんぐわちや ゆくぬうゆうえ
3. さんぐわちになりば くくるうかさりてい
いすじはまうりてい あしびぶしゃぬ

（ちりふあ）

（3.におなじ）

<唐船ドーイ>（一回目）

1. 三月三日ぬ御重や （三月三日の重箱は）
赤物入ってる浮ちやがゆる ヨーイヤナ （赤物が入っていて浮き上がる）
遊でいうちやがゆる シムぬえーじま （遊んで浮き上がる シムの栄え島）
2. （1.に同じ）
3. いちがいちしたる 三月になたい （いつかいつかと待ち遠しかった三月になった）
いちゃしわしりゆが 三月三日 （どうして忘れられようか三月三日を）
4. いちやりばどうしとう 寄らてい遊ばりば （いつになれば友達と寄って遊ぼうか）
きゆやちょんゆらてい 遊びわから （今日はここに寄って あそんで分れよう）
5. シムとうマタキとうや しまていーちどうやしが （シムとマタキとは一つの島であるが）
三月になりば しままで変わてい （三月になれば 島まで変わって）
6. （不詳） とうんじちるにげーや （不詳）

- かんしにしたほり あちぬうにげー
7. でんし^{あかむら}阿嘉村や とうゆまれるすゆる (栄える阿嘉村や 名高い)
ちゆたち^{わかむん}若者ぬ なる^{ち*}美らさ (揃って立つ若者の 並ぶ美しさよ)
8. シムぬ^{まんなか}真中に ぬちじややいせて (シムの真ん中に すばらしい家を作って)
シムぬみやらびぬ^{あし どうくる} 遊び所 (シムの乙女たちの あそびどころ)
9. マタキぬうるぐち とうんうりてい (マタキの浜下り口において)
トントンメーやとうやい (トントンメーをとろう)
においするマタカに ンぶちくわさな (眠っているマタカの連中に炊いて食べさせよう)
10. マタキぬ^{くち}口かけどうっくいぐわ (マタキの口欠けトックリを)
割^{わい}ぶしゃやあしが (割ってしまいたいが)
三月^{さんぐち}ぬ^{あし}遊び うゆうえでむぬ (三月の遊びは 御祝いです)
11. (不詳)
12. うすくがじゅまるや^{いし} 石だちるむてい (うすくがじゅまるの木は石を抱き持っている)
なしぐわだちむてい くまぬちゆいち (子供を抱き持っている この一門は栄える)
13. (不詳)
14. きゆあしでいあちゃや にんだわんしむさ (今日あそんで 明日は眠ろう)
うやちょーでーぬかなみ かけてでむぬ (親兄弟のゆるしを 得ているから)
15. (不詳)
16. (不詳)
17. 天^{てん}ぬ^{むりよし}群星や 読み^ゆば読み^ゆりに (天の群れ星は 読もうと思えば読めるが)
うやぬゆしぐうとうや 読み^ゆばならぬ (親の諭し言は 読めない)
18. ていんさぐ^{はな}ぬ花や 爪^{つみさち}先に^す染みてい (ていんさぐの花は 爪先に染めて)
うやぬゆしぐうとうや ちむにすみてい (親の諭し言は 心に染まって)
19. (8.に同じ)
20. マタキぬ^{まんなか}真ん中に こーりやっこいせて (マタキの真ん中に こーりやっこを作って)
マタキぬへーがさたーな^{あし} 遊び^{あし}どころ (マタキのへーがーさたちの 遊びどころ)
21. (10.に同じ)
22. マタキのへーがさ^{わかむん}若者ぬ あみじけーかい^い行きわ (マタキの若者が 網使い漁に行けば)

- あぎにうるいゆや くるとうになゆさ (浅瀬にいる魚が 深みに逃げてしまう)
 23. シムぬ若者ぬ ^{わかぢ}あみじけーかい行きわ (シムぬ若者が 網使い漁に行けば)
 くるとうにうるいゆや あぎになゆさ (深みにいる魚が 浅瀬にやってくる)

=== (ここで西の使いが現われる) =====

24. マタキぬみやらびぬ ^{ひゃくびん}百人なていたていば (マタキの乙女が 百人いても)
 シムぬみやらびぬ ちゆいとんけーゆーび (シムの乙女の 一人にもかなわない)
 25. シムぬみやらびぬ ^{みちび}三人なていたていわ (シムの乙女が 三人いれば)
 タマキぬへーがさたな ちゆみるくゆる (マタキの連中は 爪をくわえる)

西 遊び座 (夜) <唐船ドーイ> 歌詞一覧

1992年4月5日 与那嶺氏 (野崎小) 宅

1. ^{さんぐわらさにち うじ}三月三日の御重や (三月三日の重箱)
^{あかものへ}赤物入ってる^{うちあ}浮上がゆる (赤物が入っていて浮き上がる)
^{あし}遊でいうちやがゆる マタキぬえーじま (遊んで浮き上がる マタキの栄え島)
 2. マタキぬみやらびぬ ^{みちび}三人なていたていわ (マタキの乙女が 三人いれば)
 シムぬへーがさたな ちゆみるくゆる (シムの乙女たちが 爪をくわえる)
 3. シムのうるぐち とうんうりてい (シムの浜下り口におりて)
 トントンメーやとうやい (トントンメーをとろう)
 においするシマに んぶちくわさな (眠っているシマに 炊いて食べさせよう)
 4. いちがいちしたる ^{さんぐわら}三月になたい (いつかいつかと待ち遠しかった三月になった)
 いちやしわしりゆが ^{さんぐわら}三月三日 (どうして忘れられようか 三月三日を)
 5. きゆあしでいあちゃや にんだわんしむさ (今日あそんで明日は眠ろう)
 うやちょーでーのかなみ かけてうむぬ (親兄弟のゆるしを 得ているから)
 6. (4.に同じ)

7. こんど^{さんごわら}三月や うゆえはじみしょち (こんど三月は 御祝いの始めだ)
 やにぬ^{さんごわら}三月や ゆくぬうゆえ (来年の三月は 来年の御祝い)
8. (3.に同じ)
9. シムの口^{くち}かけどうつくいぐわ (シムの口^{くち}かけトックリを)
 割^わぶしゃやあしが (割^わってしまいたいが)
 三月^{さんごわら}の遊び おゆえでむぬ (三月^{さんごわら}の遊びは 御祝いです)
10. (不詳)
11. (1.に同じ)
12. マタキ若者^{わかむん}ぬ アミジケーかい^い行きわ (マタキの若者が 網使い漁に行けば)
 くるとうにうるいゆや あぎになゆさ (深みにいる魚が 浅瀬にやってくる)
13. シムぬ若者^{わかむん}ぬ アミジケーかい^い行きわ (シムぬ若者が 網使い漁に行けば)
 あぎにうるいゆや くるとうになゆさ (浅瀬にいる魚が 深みに逃げてしまう)
14. (不詳)
15. シムぬみやらびぬ 百人^{ひゃくにん}なていたていば (シムの乙女が百人いても)
 マタキぬみやらびぬ 一人^{ひとり}とうんけーゆーび (マタキの乙女の一人にもかなわない)
16. (5.に同じ)
17. (4.に同じ)
18. (3.に同じ)
19. マタキみやらびぬ 色^{いろ}美^{うつく}らさやし^しが (マタキの乙女の 色白なのは)
 いきぬかーぬ水^{みづ} よいやあかぬ (イキヌカーの水のおかげだ)
20. (3.に同じ)
21. (1.に同じ)

注記

- 注1 沖縄県立芸術大学付属研究所講師。
- 注2 沖縄県立芸術大学音楽学部非常勤講師、沖縄県立芸術大学付属研究所共同研究員。
- 注3 末尾の調査日時一覧参照。
- 注4 村勢要覧『ざまみ』平成3年度版による。
- 注5 神人の方々は「誰はどこの嶽の神人」という言い方をする。
- 注6 現在は脇神人（「神人組織」の項参照）の上原秀子氏が中嶽所属の神人を務めている。
- 注7 『由来記』ではヒキヨシ（現ヒジュシか）から遥拝するとある。
- 注8 この他、金城英盛氏の御教示によれば以下のような井戸があった。
 ウチチュガー ウフガーの脇にある。現在は枯れている。かつて子どもの生湯、死者の清めに使った。
 オテラガー 戦前まではこの場所に井戸があった。その後井戸をまつた。
 ミーフラーガー かつて9月の種おろしの時に使った。
 ヌルガー ヌルの井戸。
- 注9 1992年12月に亡くなられた。
- 注10 1891年生、1972年没。ヌンドゥルチの長女。現ヌル・金城幸子氏はクニコ氏の兄弟の孫にあたる。
- 注11 注3に同じ。
- 注12 1993年1月23日の実見データに基づく。取材協力：中村静子氏。
- 注13 『座間味村史』中 p.344-346。以下『村史』と略す。
- 注14 1993年1月23日の実見データに基づく。
- 注15 『村史』中 p.346。
- 注16 1993年1月24日（巳日のトゥンビー）の実見データに基づく。取材協力：中村静子氏。
- 注17 中村静子氏の御教示による。
- 注18 『村史』中 p.348。
- 注19 1993年1月25日の実見データに基づく。

- 注20 兼島菊氏の御教示。
- 注21 垣花和枝氏の御教示。
- 注22 金城英盛氏、垣花和枝氏、中村静子氏の御教示。
- 注23 垣花和枝氏の御教示。
- 注24 『村史』中 p.350。
- 注25 中村静子氏の御教示。
- 注26 1992年3月18日の実見データに基づく。
- 注27 1992年は神人の一人の都合により、午前11時から始められたが、通常は正午頃から始まる。
- 注28 垣花和枝氏によれば、昔は麦穂を一俵につき3本ずつ、計6本差した。
- 注29 垣花和枝氏によれば、かつてはムラで大量に作っていた。
- 注30 垣花和枝氏によれば、供え物はかつては菓子ではなく、年の初めに収穫した麦、粟、カーカス（一種の魚の薫製）などであった。
- 注31 1992年9月5日（旧8月9日）、ハチグッチウマチー前日のウブンワンメの実見データに基づく。取材協力：中村静子氏。
- 注32 1992年4月4日の実見データによる。取材協力：金城英盛氏、中村静子氏。
- 注33 1991年4月17日年、92年4月5日の実見データによる。取材協力：金城英盛氏、中村静子氏。
- 注34 1991年4月17日－18日、92年4月5日－6日の実見データに基づく。
- 注35 金城英盛氏の御教示。
- 注36 垣花和枝氏の御教示。
- 注37 中村静子氏の御教示。
- 注38 金城幸子氏の御教示。
- 注39 1992年6月15日の実見データに基づく。
- 注40 垣花和枝氏によれば、昔は一俵に稲穂を3本ずつ、計6本差した。
- 注41 垣花和枝氏によれば、かつてはムラで大量に作っていた。
- 注42 垣花和枝氏によれば、かつては年の初めに収穫した麦、粟、カーカス（魚の薫製）などを供えた。
- 注43 1989年、90年、91年、92年の実見データに基づく。
- 注44 忌中の家は除く。

- 注45 中村静子氏によればこの碗を「ユーノーシ」という。
- 注46 この盆のことを「デー」という。「デーサカズチ」とは「盆と杯」の意。
- 注47 最近10年間くらいは根神の金城春子（ウシチャキ）氏と中村トミ（クシジチュ）氏がデーを振っていたが、去年より中村氏が入院したため、現在は代わりを脇神人が務めている。
- 注48 金城英盛氏によるとここを中殿という。
- 注49 金城英盛氏、中村静子氏によると、かつて米を作っていた頃は、スクロイに糠水かけた。
- 注50 1992年の六月ウマチーの時は、ムチジキ、ウシチャキ、サンナンシーの3名が慶留間にわたった。この時たまたまヌルは病気で入院中であった。
- 注51 海の状態によって1、2回で済ますこともある。
- 注52 六月ウマチーの時期は台風の時期と重なるため、これまで度々慶留間へ渡ることが中止されている。筆者が実見した1989年から1992年の4カ年間で六月ウマチーで慶留間へ渡ったのは1992年のみ。
- 注53 かつては慶留間においてもスクロイの儀礼があった。小学生の男子が額に墨をつけてスクロイに扮し、大人の男性がそれを捕まえる。その時、新屋で作った神酒にモミを入れてスクロイにかけた。最後に区長が「スクロイ」3回、「グルクンドーイ」3回、「ミルクガミードーイ」1回を叫んで祭を終わったという（『村史』中 p.365-366）。
- 注54 1992年7月24日の実見データに基づく。
- 注55 垣花和枝氏の御教示。さらに垣花氏によると、カンチーの日は、アミシーといって、昔は男の子がシナトヌカーラ（現在の阿嘉港の東の浜）で小舟を作って走らせて遊んだという。
- 注56 中村静子氏の御教示。
- 注57 1992年8月13日の実見データによる。取材協力：中村静子氏。
- 注58 1992年8月13日の実見データに基づく。
- 注59 ウルンメーは現在空き家。ここに獅子頭を保管する理由は定かではないが、ウルンメーのおじいさんが獅子頭製作の名人であったという。
- 注60 与那嶺牛助氏によれば、戦前はその他、エイサー（ニンブチャー）が各戸を回った。37才までの青年団が背広を着て、三味線、太鼓で鳴らしながら一軒ずつ回っ

た。一軒につき、平均2曲くらい、時間にして15～20分踊る。ススキのような草をもってヒンプンを叩いて踊る。エイサーを見たことのある人は、与那嶺氏など明治30年代の生まれの方で、大正の中ごろ以降の生まれの人は知らない。このことから、阿嘉では恐らく大正の中ごろまでエイサーが行われていたと推測される。

注61 金城幸子氏、中村静子氏の御教示。

注62 1992年9月5日の実見データに基づく。

注63 1992年9月6日の実見データに基づく。

注64 かつてはカーカスを作っていた。また神酒もムラで作っていた。

注65 垣花和枝氏の御教示。

注66 中村静子氏の御教示。

注67 1992年9月8日の実見データに基づく。

注68 1989年9月14日、92年9月11日の実見データに基づく。

注69 1989年9月16日、92年9月12日の実見データに基づく。

注70 照喜納定盛氏によると、鰹業が盛んだったころは、鰹××本で豚1頭、××本で人一人を殺したと同じこととして供養したという。

注71 1989年9月17日、92年9月14日の実見データに基づく。

注72 昔は50才（49才）以上であれば参加できた。中村ウト氏（1902年生）は49才の時に登ったという。『村史』中 p.427。

注73 金城幸子氏、垣花和枝氏、中村静子氏の御教示。

注74 中村静子氏の御教示。

注75 『村史』によれば、かつてはウシンゴの後にタントゥイが行われた。育ったソダネを蒔く日がタントゥイの初日である。この日は現在のウルンのギヌチュの木そばに茅葺きの小屋を立てた。夕方、ハギシの森小のところに神様（ヤヘーノミチャンガナン）が降臨する。しばらくして、ウルンのところにタキノミチャンガナンがやってきてグスクの方に登っていく。その後、ウムイが歌われ、今度は神人の中から神がかってマームンミチャンガナンになるものが数名現れ、部落内を一巡する。（p.426-430）。中村ウト氏によればウムイが歌われる時は、ヌンドゥルチ宮の庭で何十人という神人が何重にも輪を作り、右手に扇、左手にハナグサンを持って、打ち合わせながら歌ったという。歌詞は「しらちゃねがおゆえ

あまちゃねがおゆえ・・・』というものであったという。

- 注76 中村ウト氏、垣花和枝氏、中村静子氏の御教示。
- 注77 垣花和枝氏、中村静子氏の御教示。
- 注78 中村静子氏の御教示。また『村史』によると、別の縄にチマグ（ひづめ）を結んで、集落の入口に吊した。神人は浜で祈願をした（p.393）。中村ウト氏によるとクチマチュイと称し、ムラの発祥の地とされるウルグチで肉を供えたという。
- 注79 垣花和枝氏の御教示。
- 注80 垣花和枝氏によると氏の子供の頃（昭和初期）、見た記憶があるという。
- 注81 『村史』中 p.393。
- 注82 垣花和枝氏の御教示。また、『村史』によると、この日、御殿の前に若松を立てて、首里に向かって遥拝した。また、神人、女性、15才以上の男性はヌンドゥルチに集まり、航海安全を祈願したという（p.394）。
- 注83 中村ウト氏の御教示。
- 注84 中村静子氏、垣花和枝氏の御教示。
- 注85 垣花和枝氏の御教示。
- 注86 金城英盛氏、垣花和枝氏、中村静子氏の御教示。
- 注87 昔は相手の鉢巻を奪おうと挑み掛かるような激しい仕草も多々あったといい、これをガソーという。今は昔に比べて随分おとなしくなったものだという。
- 注88 ウマチー等の神行事では、二本のピンシーで各々一回ずつ計二回注ぐ。垣花和枝氏によれば一回だけでは縁起が悪いからという。
- 注89 1991年のハマウリでは参加者の都合により、午前10時から行われた。
- 注90 垣花次郎氏、和枝氏の御教示。
- 注91 「沖縄の年中行事」比嘉政夫『沖縄民俗学の方法』新泉社 1982 p.42、崎原恒新『沖縄の年中行事』沖縄出版 1989 p.56 参照。
- 注92 『那覇市史 那覇の民俗』資料篇第2巻中の7 那覇市企画部市史編集室 1979 p.702 参照。
- 注93 同上 p.704-706 参照。この道ジュネーについては、後述のように旧暦六月の大綱引きにおける女性の歌舞とも併せて考察する必要があるだろう。
- 注94 『浦添市史』第六巻 浦添市教育委員会 1986 p.397。
- 注95 『ぎのわん 字宜野湾郷友会誌』p.337、p.406 参照。

- 注96 『座間味村史 中』 p.358。
- 注97 同上 p.353。
- 注98 『那覇市史 那覇の民俗』資料篇第2巻中の7 p.527、p.709参照。
- 注99 『おきなわの祭り』沖縄タイムス社 1991 p.90参照。
- 注100 『浦添市史』第六巻 p.398。
- 注101 中村ウト氏は正月のシマヌウガンで歌われる〈三句〉のことを〈正月クェーナ〉と呼んでいる。『日本民謡大観（沖縄・奄美）沖縄諸島篇』日本放送出版協会 1991 P.452-454参照。
- 注102 ここでは詳述は省くが、ウムイは旋律の種類によってA～Eに分類している。
- 注103 『日本民謡大観（沖縄・奄美）沖縄諸島篇』P.454。
- 注104 同上 P.449-452。
- 注105 同上 P.441-443。

調査日時一覧（1993年3月現在）

※調査者、聞き手のないものは上に同じ。

[1989年]

- 7月14日-20日 六月ウマチー調査
 - ・ 7月16日 ウマチーの準備（神酒作り）調査 於 金城信盛氏宅
調査者：小柴はるみ（東海大教授）、寺内直子、佐藤久美（東海大学生）
 - ・ 7月16日 ウマチー、タントゥイについてインタビュー 於 中村ウト氏宅
話し手：中村ウト氏（M.35生） 聞き手：小柴はるみ、寺内直子、佐藤久美
 - ・ 7月16日 年中行事についてインタビュー 於 金城英盛氏宅
話し手：金城英盛氏（S.2生）
 - ・ 7月17日（旧6月15日）ウマチー実況取材 於 上殿、下殿、前の浜
調査者：寺内直子、佐藤久美
 - ・ 7月19日 サンナンシーについてインタビュー 於 兼島菊氏宅
話し手：兼島菊氏（T.14生） 聞き手：寺内直子、佐藤久美
- 9月13日-19日 八月行事調査
 - ・ 9月14日（旧八月十五夜）十五夜行事調査 於 ムンドゥルチ 調査者：寺内直子

- 9月15日 敬老会見学 於 公民館 調査者：寺内直子
- 9月16日 ウミノウガン（海の御願）調査 於 イビヌメー
- 9月17日 タキノブイ調査 於 大嶽
- 9月17日 年中行事についてインタビュー 於 金城英盛氏宅
話し手：金城英盛氏、トミ子氏（S. 2生） 聞き手：寺内直子

[1990年]

- 8月2日－6日 六月ウマチー調査
- 8月3日 慶留間のウマチーについてインタビュー 於 中村克子氏宅
話し手：中村克子氏（M. 35生） 聞き手：寺内直子、松村智郁子（県立芸大生）
- 8月4日 ウマチー準備取材 於 金城信盛氏宅、前の浜
調査者：寺内直子、松村智郁子
- 8月4日 ハーリー船の歌の練習見学 於 公民館 歌と話：青年団の皆さん
- 8月5日 六月ウマチー（旧6月15日）調査
於 慶留間・下殿、上殿、阿嘉・前の浜

[1991年]

- 4月16日－18日 清明祭、浜下り調査
- 4月16日 浜下りの準備調査 於 金城英盛氏宅 話し手：金城トミ子氏
聞き手：久万田晋、寺内直子
- 4月17日（旧3月3日） 清明祭調査 於 墓地、拝所 話し手：金城英盛氏
調査者：久万田晋、寺内直子
- 4月17日 浜下り調査 於 前の浜、ウフンジョーシ、垣花商店
- 4月18日 浜下り（2日目）調査
於 ヌンドゥルチ、ウフンジョーシ、イビヌメー、総合センター
- 4月18日 三月遊びの歌についてインタビュー 於 垣花和枝氏宅
話し手：垣花和枝氏（T. 9生） 聞き手：寺内直子
- 7月26日－30日 六月ウマチー調査
- 7月26日（旧6月15日） 六月ウマチー調査 於 上殿、下殿、前の浜
調査者：小柴はるみ、赤羽由規子（明治大講師）、久万田晋、寺内直子

- 7月27日 神人、年中行事についてインタビュー 於 金城幸子氏宅
話し手：金城幸子氏（S. 9生）
聞き手：小柴はるみ、赤羽由規子、久万田晋、寺内直子
- 7月28日 年中行事、歌の歌詞についてインタビュー 於 垣花次郎氏宅
話し手：垣花次郎氏（T. 7生）、和枝氏
- 7月28日 ウマチーについてインタビュー 於 金城英盛氏宅
話し手：金城英盛氏
- 7月29日 御嶽、歌の歌詞についてインタビュー 於 中村ウト氏宅
話し手：中村ウト氏

[1992年]

- 3月17日-19日 二月ウマチー調査
- 3月18日(旧2月15日) 二月ウマチー調査 於 上殿、下殿 調査者：寺内直子
- 3月18日 年中行事についてインタビュー 於 中村静子氏宅
話し手：中村静子氏（T. 9生） 聞き手：寺内直子
- 3月18日 年中行事についてインタビュー 於 垣花和枝氏宅
話し手：垣花和枝氏
- 4月3日-6日 清明祭、浜下り調査
- 4月4日 清明祭の供え物についてインタビュー 於 金城英盛氏宅
話し手：金城英盛氏 聞き手：久万田晋、寺内直子、松村智郁子
- 4月4日 清明祭の供え物についてインタビュー 於 中村静子氏宅
話し手：中村静子氏
- 4月5日 清明祭調査 於 墓地、拝所
話し手：金城英盛氏、中村静子氏
聞き手：久万田晋、酒井正子、寺内直子、松村智郁子
- 4月5日 浜下り調査 於 前の浜、ウフンジョージ、遊び座
調査者：久万田晋、酒井正子、寺内直子、松村智郁子
- 4月6日 浜下り調査
於 ヌンドゥルチ、ウフンジョージ、イビヌメー、総合センター
- 6月14日-16日 五月ウマチー調査
- 6月14日 ウマチーについてインタビュー 於 金城幸子氏宅 話し手：金城幸子氏

- 聞き手：小柴はるみ、山本宏子、久万田晋、寺内直子、松村智郁子
- 6月15日 三月三日の遊び歌についてインタビュー 於 中村千代氏宅
話し手：中村千代氏（T.15生） 聞き手：寺内直子、松村智郁子
 - 6月15日 五月ウマチー調査 於 上殿、下殿、慶留間・上殿、下殿
調査者：小柴はるみ、山本宏子、久万田晋、寺内直子、松村智郁子
 - 6月16日 年中行事についてインタビュー 於 金城英盛氏宅 話し手：金城英盛氏
聞き手：寺内直子、松村智郁子
 - 7月13日－15日 六月ウマチー調査
 - 7月13日 ウマチー準備調査 於 金城信盛氏、金城春子氏宅、前の浜
調査者：寺内直子、松村智郁子
 - 7月14日（旧6月15日） 六月ウマチー調査
於 上殿、下殿、前の浜、慶留間・下殿、上殿
 - 7月15日 井戸、拝所についてインタビュー 於 金城英盛氏宅
話し手：金城英盛氏 聞き手：寺内直子、松村智郁子
 - 7月24日－26日 カシチー調査
 - 7月24日 カシチー、ウマチーについてインタビュー 於 垣花和枝氏宅
話し手：垣花和枝氏 聞き手：寺内直子、松村智郁子（以下調査者も同じ）
 - 7月24日（旧6月25日） カシチー調査 於 スンドゥルチ
 - 7月25日 六月ウマチーについてインタビュー 於 民宿オーシム
話し手：中村静子氏、垣花和枝氏
 - 8月13日－14日 旧盆調査
 - 8月13日（旧7月15日） ウークイ調査 於 中村静子氏宅
話し手：中村静子氏 調査者：寺内直子、松村智郁子
 - 8月13日 盆の獅子舞調査 於 スンドゥルチ、井戸、村境
獅子舞：青年団のみなさん
 - 8月14日 旧盆の行事についてインタビュー 於 前の浜
話し手：与那嶺牛助氏（M.39生）
 - 9月5日－16日 八月行事調査
 - 9月5日 八月ウマチーについてインタビュー 於 前の浜 話し手：垣花和枝氏
聞き手：寺内直子、松村智郁子（以下調査者も同じ）
 - 9月5日 ウブンワンメ調査 於 下殿（ウーシムの宮）

話し手：中村静子氏、垣花和枝氏、喜屋武トミ氏

- 9月5日(旧8月9日) シバサン調査 於 元地、ウーシム
話し手：金城トミ子氏(元地)、中村静子氏(ウーシム)
- 9月6日(旧8月10日) 八月ウマチー調査 於 上殿、下殿
- 9月7日 八月行事についてインタビュー 於 中村静子氏宅 話し手：中村静子氏
- 9月8日(旧8月12日) シマヌウガン(島の御願)調査 於 ヌンドゥルチ
- 9月10日 十五夜の準備調査 於 中村静子氏宅 話し手：中村静子氏
- 9月11日(旧8月15日) 十五夜行事調査
於 ウルンメー、ヌンドゥルチ、ウフンジョーシ、井戸、村境
- 9月12日 ウミヌウガン(海の御願)調査 於 海、イビスメー
- 9月14日 タキヌブイ調査 於 大嶽、クボー嶽
- 9月15日 敬老会見学 於 阿嘉島離島振興総合センター

[1993年]

● 1月22日-26日 旧正月行事調査

- 1月22日(旧12月30日) トゥシヌユル(年の夜)インタビュー 於 中村静子氏宅
話し手：垣花和枝氏、中村静子氏 聞き手：寺内直子、松村智郁子
- 1月22日 ウーシムの系図についてインタビュー 於 民宿オーシム
話し手：中村武雄氏(S.16生)
- 1月23日(旧元日) 年頭御願調査 於 ヌンドゥルチ家
調査者：寺内直子、松村智郁子(以下聞き手も同じ)
- 1月23日 正月行事についてインタビュー 於 中村静子氏宅 話し手：中村静子氏
- 1月24日(初巳日) 正月トゥシビー調査 於 中村静子氏宅
話し手：金城幸子氏、中村静子氏
- 1月24日 神人の系譜についてインタビュー 於 中村静子氏宅
話し手：中村静子氏、垣花和枝氏、中村せつこ氏(T.2生)
- 1月25日 シマヌウガン(島の御願)調査 於 ヌンドゥルチ
- 1月25日 シマヌウガンについてインタビュー 於 中村静子氏宅
話し手：中村静子氏、中島トミ氏
- 1月25日 正月のウムの歌詞についてインタビュー 於 垣花次郎氏宅
話し手：垣花次郎氏、垣花和枝氏